Fの軌跡

ひこうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆの軌跡

【Ｎコード】
Ｎ５５８６Ｚ

【作者名】
ひこうき

【あらすじ】
『モールド』と呼ばれる、人間に眠った潜在能力を最大限に引き出す液状薬品によって、旧世界から姿を大きく変えた近未来世界が舞台。
この革命的な薬品への『適合率』で、個人の能力に極端な差が生まれる残酷な上下社会の中、主人公『支倉恭司』は適合率０％という最大のコンプレックスを抱えながらも、それなりに楽しい学園生活を送っていた。
しかし現実は、友人の突然の失踪と、『一人の少女との出会い』を

きっかけに糸も容易く終わりを迎える。

バトル物です。毎日朝４時～５時頃更新中。

プロローグ　（注：初回2話分掲載）（前書き）

バトル物です。現実と似通った世界観を創り出したかったので、あまり『厨二』と呼ばれるような単語は出てきませんが、バリバリのバトル物です。

当時の自分が主人公の心情変化の描写に最も力を入れていたこともあって、主人公の変化描写を読者の方々に一番良い形で提供するには、（読んで頂ければ分かりますが）プロローグにはこのエピソードを持ってくる他無く、初っ端から主立った会話が『野郎だけ』によるものという、トンデモな事態になっております。

大丈夫です。普通プロローグでは『主人公ヒロインの運命的な出会い』がセオリーになりかけているのも分かっております。

会話がやたらと青臭いのも分かっております。

ヒロインはプロローグのすぐ後に登場します。この次のエピソードもご覧頂ければ幸いと存じます。

更新の件についてですが、既に原稿が8割方完成した状態で手元にあるので、しばらくは毎日更新という形で提供させて頂きたいと思います。毎朝4時頃、遅くとも5時頃の更新を予定しております。

最後までお付き合い頂けたら幸いです。

PS．感想とかレビューとか、一言でも頂けるとメチャクチャ喜びます。

プロローグ　（注：初回2話分掲載）

―第一章―

1

物事に、絶対なんてものは存在しないだろう。しかし、この世界の唯一にして絶対の事実。

――――支倉恭司は、世界に見放された人間である。

季節は春。

厳しい冬を越え、世間一般では、夢と希望に満ち溢れているらしい、春。

桜の花びらが舞い散る快晴な午後の校庭で、新たなクラスメイトと共に体力測定に参加していた俺、支倉恭司は、深い、深いため息をついた。

耳を澄まさずとも、聞こえてくるのは他生徒の歓声。記録が伸びたやなんやだの。

校庭では、新入生を含めた全校生徒８００人ほどが、様々な競技に熱心に打ち込んでいる。

俺は、毎年訪れるこの季節が嫌いだった。

新たな出会いへの希望なんかより、現実を突きつけられる絶望の方が、遥に大きかったからだ。

人だかりから離れた俺は歓声を気にすることなく、地面に胡座をかき、手元の測定結果に目を通す。そして自身の記録を見ては、さら

に深いため息をついた。
このため息は、落ち込みからくるものではない。
足掻いても足掻いても変わらない、残酷な現実に対する『諦め』から来るものだった。

自分が、世界に見放された人間であるという。

俺の測定結果は、以前として世界の除け者に相応しいものだった。
それは凄惨たるものだった。
一人で地面に座ったまま遠くを見つめていると、不意に後ろから誰かに背中をこづかれる。
「よっ、新学期早々、何落ち込んでるんだ？」
からかうような笑みを浮かべて話かけてきたのは、高一からの仲である小西哲平だった。
能力が低い俺を同類だと思ったのか、知り合った当初から何かと絡んでくる。今回高二に進級した際も同じクラスになってしまったのだ。
俺は口を尖らせて言い返す。
「別に落ち込んでなんかねーよ」
「まあまあそう言うなって。どれ、結果見せてみろよ」
哲平はひょいっと俺の手から測定用紙を取り上げた。
「ふむふむ、１００Ｍ走、１１秒５８。ハンドボール投げ、３０Ｍ。立ち幅跳び３Ｍ５０。前回より上がったじゃないか」
なめ回すように眺めた哲平はしかし、引きつった笑顔で俺に用紙を返す。俺はそんな友人を睨み付けながら、乱暴に用紙を奪い返した。
「それはそうだけど。じゃあお前の結果は？」
気まずそうに頬を掻きながら、哲平は用紙に視線を落とす。
「えーっと。１００Ｍ走、７秒３４。ハンドボール投げ、２１０Ｍ。立ち幅跳び７Ｍ５０、だな」
「そらみろ」

そらみろそらみろそらみろ。運動音痴の哲平にさえ勝てないじゃないか。

俺の落ちこぼれ具合は、異常なのだ。

スポーツテストが全国最下位なのは当たり前。腕相撲では女子に負け、ハンドボール投げにいたっては小学生にまで負ける始末。学習面で言えば、普通に授業についていけない。それも全国の中学生に完敗するレベル。留年しないのが奇跡と言ってもいい、といった具合なのだ。

これで、世界に見放された人間ということが納得できるだろう。

では、一体どうしてここまで落ちこぼれることになったのか。

その原因は分かり切っており、今更考えるまでも無かった。

「『モールド』さえなけりゃな～」

そう俺は呟く。

モールド。

世界中の８９億４０００万人の方々にとっては地球上で最も有益な薬であり、俺にとってはまさに地獄の創設者のような存在である液状薬品の一般名称だ。このモールドと呼ばれる薬の効果は、今では俺を除いた全世界の人間が、その身を持って堪能している。

モールドの効果。

それは服用した人間の潜在能力を最大限まで引き出し、知力、体力、五感などのありとあらゆる能力を底上げするというもの。効果は半永久的、摂取後は死ぬまで体内に残留し続ける。そんな魅力溢れる効果に対して、副作用は一切無し。年齢制限などの条件も皆無で、その上摂取の際は、国の医療保証で料金がタダと来た。

おかげで誰もが容易く超人になろうと、開発当初から凄まじい人数が摂取を初めて、１０年前に全世界の人が摂取し終える結果となっ

た。
しかし俺を苦しめている問題は、このモールド自体には無い。
人類がこの薬一つで進化したことは喜ぶべきことだし、俺もこのモールドを摂取しているのだから文句を言えた身ではない。
俺が苦しむ問題。
それは、この薬の影響度合いが人によって違うということなのだ。
つまり同じ超人になれる薬を服用しても、モールドとの相性で、人によって能力に差が生まれてしまうのだ。
このモールドとの相性は、『適合率』と呼ばれている。
この適合率が高くなるにつれて、個人の能力が大きく跳ね上がると考えて貰って構わない。
３０～４０％が一般的で、５０％を超えるエリートは滅多にいない。
そしてその逆もまた然りで、２０％から３０％がいわゆる、『落ちこぼれ』と呼ばれる人達だ。
うんうん、と俺の意見に賛同した哲平は、何度か頷いた後に俺を指さす。

「適合率０％の人」

「うっさい！！」
「イテッ！！」
もっとも気にかけていることを指摘された俺は、哲平の頭に本気のゲンコツを食らわせる。適合率が２０％以上も離れてると、本気の拳ですら軽い小突きとしか思われないのだから、一層悲しくなる。
そう、俺は世界の人口８９億４０００万人の中で、唯一のモールド適合率、０％の男だったのだ。それは統計データからの紛れのない事実。
本当に、世界中で俺だけなのである。
１％でも０．１％でもない、純粋に０が一個。どうだ世界でたった一人だけダゼ！すごいだろわははと自慢できることでは無い。問題

である。大問題である。
このモールドという液状薬品の力は、本当に絶大なのだ。
この薬品の登場が、世界を変えたといっても過言ではない。
経済は大いに安定し、技術レベルはわずか十数年で過去１００年分に相当するほど向上した。
大まかな環境問題も、全て科学の力で解決された。
医療レベルも、１５年前と比べれば遥に向上し、今時１００歳なんて珍しくない。
ふと空を見上げれば、家庭用小型飛行船が飛び回っている。フロートシステムという技術が注目されてから暫くしたこの現代社会で、車という代物を使っている人は、今となってはほとんどいない。
人類の能力が底上げされた結果は、ありとあらゆる所で顕著に表れている。
当然教育面でも、この薬品の影響は大いに現れている。
５年前を機に、考査やテストといったものが世界中で一斉に廃止された。例えそれらを行ったとしても、順位が適合率の高い順になってしまうから。意味がないのだ。
学校、資格、会社などなど、ありとあらゆる面接も含めた試験も当然廃止。合格要点が、『アナタの適合率は？』一つだから。
今、俺や他のクラスメイトが行っている体力測定も、モールド適合率と身体能力の統計を採るため、仕方なくやっているものなのだ。
そんなワケで、薬の影響を一切受けられない俺が落ちこぼれているのは、当たり前なのである。
この薬の力無しで落ちこぼれから脱出しようとするのは、三輪車でＦ１レースの優勝を狙うようなものなのだ。
努力なんてものは無価値に等しく、適合率という生まれつきの才能だけで人の価値が決まってしまうこの現代社会に嫌気がさし、俺は再びため息をついた。
「ホントなんでお前、適合率が０％なワケ？どんなに低くても全員２０％超えてんのにさ」

ホレホレ、と哲平が指をさす。
そう言うお前も学年最低レベルだけどな、と思いつつも哲平が指さす方向を向くと、新入生の女子達がハンドボール投げをしていた。
「ホラ、今投げたコ。今年最低適合率の２１％だぜ。確か名前は、宮谷茜、だっけな。今年入ってきた女子の中じゃ相当なアタリらしいぜ」
哲平の指さす少女は、随分と華奢な体付きをしていた。
遠くで良く見えなかったが、長い黒髪は一本にまとめてあり、いかにもなお嬢様の雰囲気を漂わせている。
周りでは他学年の男子が集まり、その少女を囲むようにして立って騒いでいた。どうやら『宮谷茜』という少女は、男子から結構な支持を受けているようで。モテ具合だけは適合率関係無いのだろうか、などと俺が思考を巡らせていると。
女の子の投げたボールは、大きな放物線を描き、地面に落下した。
「おっ、１８０Ｍか。お前何Ｍだっけ？」
「・・・・・３０Ｍ」
「君の６倍だね、恭司君」
「そうだね、哲平君」
「華奢なお嬢様に力で負けた感想をどうぞ」
「もう死にたい・・・・・・」
華奢でか弱な後輩の女子に、力で負ける高校二年児の気持ちを考えてご覧なさい。自殺もしたくなるから。
しかし俺はこんなことはもう慣れっこだ。残酷な現実を突きつけられたところで、自殺などしない。
哲平もこの理不尽な世界に対して不満を抱いているのか、俺の隣で愚痴を溢す。
「２４％の低適合者だから言える事だけど、ほんっとこの世界って、不公平だよな！」
「まあな」
進路も就職も富も名声も、何もかもが適合率という数値一つで決ま

ってしまう。単純明快、理不尽極まりないこの社会は本当に嫌いだ。

モールドと同時期に生まれてきた俺たちの世代はまだいい。
問題は、ちょうど職を得て、幸せな家庭を持つような世代の人だ。
この超人的な力を引き出す液状薬品によって、一体何人の人が幸福な人生を奪われたことか。
例えば、必死に努力して努力して、ようやく名声を手に入れられた人がいるとしよう。
また、仕事もせず町中をブラブラしているような遊び人がいるとして。
モールドは、必死に努力した前者の人が、後者の人の前に這いつくばらなくてはならないような状況を、糸も容易く創り上げてしまったのだ。
血の滲むような思いで手に入れた名声を、次の日起きたらどこの誰かも分からない遊び人に奪われて、ペコペコと頭を下げるような生活。
モールドは確かに人類に成功をもたらした。しかし、その成功と同じ数だけの不幸が人々に訪れたことも事実だ。
本当に辛いのは、その不幸になった人々が大方努力家だということだ。
彼らはもう一度名声を手に入れようと、必死に努力して努力して、それでもダメで、尚更足掻こうとする。しかし結局は、適合率という才能の壁が立ちはだかり、落ちこぼれる。
生きているのが嫌になる。
そんな人々が次々と自殺をしていくのを知るのは、本当に辛い。
だから、俺はそうならないために、自分が超低適合者であることを受け入れたのだ。
受け入れてしまえば、足掻くことを『諦め』てしまえばどうってことはない。別に職が無くなるわけでもない。現に今は力が必要ない単純作業の工場でアルバイトをしている。

上を目指さず、低適合者は低適合者のままで、そのレベルにある幸せを求めればいい。
それだけの話なのだ。
そうぼんやり考え事をしていると、いつの間にか立ち上がっていた哲平に呼ばれる。
「おい、恭司。あれ」
「ん？何？」
俺もその場から立ち上がり、哲平の指差す人だかりを見てみる。
誰かが揉め事をしているようだが、遠すぎて俺には良く見えない。
揉めている２人の周りには、２０人くらいの野次馬ができている。
「荒瀬だ。アイツ、また大杉にちょっかい出してやがる」
やはり２４％と０％の差だろうか。
３００Ｍはあろうこの遠距離から、哲平は個人の顔までしっかりと捉えているようだ。視力も大分違う。

荒瀬。

確かこの学校でも大分有名な金髪チャラチャラ不良だ。
適合率が４７％であることを自信にしてか、親が相当のお偉いさんだからか、度々教師にも刃向かっている。イライラしている時は、自分より適合率の低いヤツを相手に、気が済むまで殴り続けるというのを耳にしたことがある。残念ながら親の影響で退学にはならないそうで。
俺はまだ絡まれたことはないが。大杉というヤツは、荒瀬の怒りをかったか、それとも運が悪かったか。
いずれにせよ、この状況での俺の行動は決まっている。
「まあ、ああいうヤツは放っとくのが一番だって。何でイライラしてるのか分からないけど、関わると俺らまでとばっちりくらうぞ」
低適合者だから、と付け足す。しかし、俺の言葉に哲平の返事はない。

その様子が気になった俺は隣の哲平の顔を一瞥する。
今までのヘラヘラとした表情から、怒りに燃えるような表情へと変わっていた。拳を握りしめ、食いしばられた歯がギリギリと音を立てている。
「お、おい哲平落ち付けって。別に他人のことだろ?気にすんなよ」
俺の言葉を無視し、哲平は突如荒瀬に向かって駆け出そうとした。
とっさに俺は哲平の左腕を掴む。動きを止められた哲平が、怒りと驚きの眼差しを俺に向ける。
「!?何だよ、恭司!離せよ!」
「いいから!俺の話を聞けって!ああいうヤツに関わると、結局最後までカモに・・・・・・」
「この状況を放っておけるか!」
そう強く言い放った哲平は、俺の手をふりほどくと、駆け出した。
「お、おい!待てよ!」
俺も慌てて追いかける。しかし、適合率の差だろうか。
哲平との距離は確実に引き離され、視界の先の哲平が少しずつ小さくなっていく。
そして。
「うぉりぃやあああああ!!!」
俺の視界の先で、振られた哲平の拳が、荒瀬の顔面を直撃した。油断していたのか、荒瀬は大きく仰け反り、地面に激しく尻餅をついた。周りで見ていた野次馬が突然の事態に騒ぎ始める。
「やっべー!アイツ本当にやりやがった!」
俺はそう叫びながら、ダッシュで哲平の元まで駆けつけた。視界の右端にいる哲平に比べて、俺の息は随分と上がっている。
哲平の左隣りで尻をついているヤツがいた。
大杉というデブっちょいヤツだ。随分と殴られたのか、顔が大きく腫れ、手足の所々から血が滲んでいる。随分酷くやられたものだ。
そう呑気に状況を観察していると、哲平の先にいる荒瀬がゆっくりと起き上がった。

体格はがっしりとしているが、大分痩せている。そしてやたらと高身長だった。１７０?前後の哲平と俺からすると、１８５?位はあるだろうか。

哲平に殴られたところが赤く腫れており、荒瀬は口からペッと血混じりの唾を吐く。そしてがっしりとした腕で、乱暴に哲平の体操服の襟元を掴み上げた。その迫力に、俺は思わず後ずさる。

「いてーじゃねぇか、この野郎」

ドスの効いた声で、哲平を威嚇する。哲平の襟元を掴んでいた荒瀬の拳に力が入り、それに気圧されたのか、恐怖を振り払うように哲平は叫びながら荒瀬に殴りかかった。

しかし。

哲平の拳が荒瀬に当たることは無かった。

適合率が２０%以上離れているのが痛かったようだ。恐らく、荒瀬には哲平の拳が大層ゆっくりに感じられたことだろう。

哲平が地面にねじ伏せられた後は、まさに一方的な暴力だった。哲平をサンドバックとでも思っているのか、と考えてしまうくらい、容赦ない暴力だった。

荒瀬は笑っていた。

さすがに周りのギャラリーも恐ろしくなったのか、その暴君を止める者は一人も出ないまま、視界から去って行った。

どうせ俺が助けに入っても、とばっちりをくらうだけだ。

そう思った俺は、多少の罪悪感を意識しつつも、せめて哲平の行動を無駄にしないため、地面に座り込んだまま泣きそうになっている大杉という男子に肩を貸して、その場を去った。

2

その後、俺から状況を知った教師が駆けつけて、事態は収束した。

荒瀬の両親は、学校とも繋がりが深い組織のお偉いさんで、職を失うのが怖かったのか、教師は荒瀬に対して軽い注意しかしなかった。

哲平の怪我は大杉というヤツよりもずっと酷く、体力測定後の午後の授業には参加せず、保健室で安息をとっていた。俺が保健室を寄った際、哲平は意外にも元気だった。顔にはいくつかのガーゼが張ってあり、笑う度に変に歪んだ。その様子を見て、俺も思わず笑った。

そして現在、放課後。

俺と哲平は、公共の飛行船に乗っての帰宅途中だった。

飛行船といっても、１０年前まで使われていた、ガスを入れて浮遊する飛行船ではない。空中で静止ができる飛行機とでも言ったらいいか。

俺と哲平は、飛行船内の窓側に座り、黙りこくっていた。

普通ならば、登下校の時間帯は混雑しそうなものだが、船内は閑散としており、俺と哲平を含めても数名しかいなかった。

窓の外は個人飛行船が忙しく行き来しており、沈みかけの夕日と相まって、都会らしい風景を映し出していた。

沈黙が続く中、俺の前に座っていた哲平が口を開く。

「サンキューな。大杉逃がしてくれて」

「何改まってるんだよ」

感謝される理由はない。むしろ俺が謝るべきなのだ。

哲平を助けに入らなかったことを。

俺が言葉をつまらせていると、哲平が俺の心境を察したように言った。

「別に気にスンナ。第一俺が勝手に起こした行動だし、お前は止めるよう忠告してたろ」

「まあな。飛び込んだお前が悪い」

「くっ、コイツ開き直りやがって！」

「教師を呼んだことも感謝してほしいな」

「孤独な生涯を送っていくお前の姿が浮かんだよ」

軽い談笑の最中、俺は哲平に一つの疑問を感じた。

当然といえば当然の疑問であるが。

「なぁ、哲平」
「何？」
「お前、何であんなことした？」
あんなこと、とはもちろん、今日の荒瀬の件だ。
哲平が上を向く。
「恭司よ、俺が人助けしちゃダメなのか？」
「いや、そんなことは言ってない。ただ、とばっちりくらって負けるの知ってて、何で助けに入ったかなって」
哲平は少し唸った後、開き直ったように言う。
「何でだろ？」
「おい」
ハハハ、と軽笑の後に、哲平は明るい調子で言う。
「いやな、なんかああやって楽して得た力を振りかざしてるヤツ見てると、俺のオヤジやお袋を否定されたみたいでな。ついカッとなっちゃったんだよ」
しまった、と。哲平の話を聞いた後に、俺は激しく後悔した。
「わりぃ」
「気にスンナって」
バカだった。何で忘れていたんだろう、と自分を責める。
哲平の両親は、８年前に自殺をしていたのだった。
哲平が小さかった頃に、両親二人で経営していた会社が倒産。当然例の薬の影響だ。それから数年後に投身自殺。
哲平は明るい調子で続けた。
「だからさー、俺の親ってあれじゃん？割と努力家だったのよ。会社が潰れた後も、借金抱えても、元ライバル会社の平社員やりながら金貯めて、もう一度会社再建するんだって。無駄に一生懸命になってさー」
哲平の言葉に、俺は黙って耳を傾ける。
「結局才能の壁を越えられなくて、その会社すらクビになってさ。で、橋の下でおだぶつよ」

哲平が前から頭をのめりだして、笑顔で聞いてきた。
「俺の親、バカみたいだろ？」
「そんなことねーよ」
俺は一応、否定する。
「うそつけ。怒んねーから、本当のこと言ってみろよ」
「・・・・・まあな。バカみたいだ」
「ん」
「お前の両親、バカだよ」
哲平は笑顔のままだ。
俺は哲平から視線を逸らすと、窓の外を眺めながら吐き出すように言う。
「だって、勝てもしないものに抗おうとするなんてバカじゃないか。それで、一番大切な命捨てて、息子に借金残して、ホント何がしたかったのか分かんないな。まあ、生き方なんて人それぞれだから、否定はしないけど。けどな、俺に言わせればバカだね。大バカだ」
お前らしいな、と哲平は笑顔を見せた後、前向きに座り直す。
「俺も、オヤジとお袋はバカだったと思うよ。けど、間違っていたとは思えない。だって、この世に絶対なんてものは存在しないじゃないか。そりゃ、この薬の壁を超えられる可能性なんてほぼ０に等しいけど、それでも抗い続けた俺の両親はスゲェと思うよ」
「借金背負わされて、辛いバイトの毎日を送っていてもか？」
哲平は、迷いのない声色で返してくる。
「ああ。俺のオヤジとお袋は、尊敬に値するってな。だから、俺も『諦め』ない。荒瀬にだって、いつかはケンカで勝ってやろうと思ってるし、適合率なんて関係ないね」
俺は少し考え込む。そして浮かんだ疑問を哲平に投げかける。
「お前、大杉を助けようとしたのは初めてか？」
「んにゃ？何でそんなこと聞くんだ？」
「いや、お前のバカ具合を測定するため」
「助けに入った数なんて、もう数え切れないな」

高一の頃から、時々キズを作って帰ってきたのはそのためだったか、と納得する。
と同時に呆れつつも、笑みをこぼす。
「お前は大バカだよ。いや、大バカ超えて超大バカだ」
「おう。最高の誉め言葉だ」
しばらくお互いに苦笑していたが、ため息で一区切り付けて、俺から切り出す。
「まーでも、俺はお前みたいにはなれないな。能力が低いからって、自分から無茶なことに挑戦しようとは思わない。抗う辛さは知らなくても、負けることは、その行動が無意味なのは知っているからな」
それでいいだろ、と哲平は優しげに呟く。
「俺とお前は正反対の人間なんだよ、恭司。俺は、抗うことの辛さを知っていても抗う。お前は、抗うことの辛さを知らないが抗わない。俺はバカでお前は利口だ。俺の方が高適合者だけどな」
うっせ、と俺は投げやりに返す。
自分で言うのも何だが、俺自身、俺は低適合者の中でもかなり利口な方だと思う。
過去に栄光を手にしていた大人と同じで、低適合者の現代学生は、足掻けば何とかなると思い上がりやすい。
過去に一度成功しているから、その時以上に努力すればなんとかなる。
そういう思考で足掻く大人に対して、考査などの他者と競う場を無くした俺達には、本格的な敗北と失敗を喫するような機会があまり無い。
だから、無駄だともしらずに才能の壁に挑戦する。
そして、足掻いて足掻いて足掻いては、不変の現実を思い知らされる。
結局最後は『諦める』。哲平の両親のような大人になるのを未然に防いでいる点では、彼らには有益な挑戦かもしれないが。

だけど、俺は違う。

その挑戦が自身にとって無益であることを理解している。なぜなら俺は常に正しく現実を知り、それを受け入れているから。

哲平の両親のような大人にはなり得ない、なれないから。

これからの時代では必要ないと判断された上で廃止された、考査やテストがいい証拠だ。こういうものが、努力が無価値だという現実を俺に正確に教えてくれる。

だから、挑戦しない、抗わない、失敗しない。

過去も今もこれからも。

勝ち目が無く成功率が低いと断定できた物事には挑戦せず、もっとも確実で安定した道を選ぶ。これほど利口な低適合者が他にいるだろうか。

その点、俺に言わせれば哲平はバカの極みだ。

コイツは他の低適合者と違って、挑戦の無意味さを知っている。抗うことの辛さを理解している。結局は無駄骨に終わることを確信している。

なのに、挑戦する。抗う。失敗する。そして何度も挑戦する。

荒瀬の件がいい例だ。負けても負けても何度も挑戦する。

本当に哲平は、バカだ。

俺がそんなことを考えていると、哲平が再び身を乗り出してきた。

「なぁ、恭司。俺前から気になってんだけどよ」

少し躊躇うような素振りを挟んでから、哲平は俺に聞いてくる。

「お前、何でそんな『諦め』グセがついたんだ？」

俺は少しだけ、頭を揺さぶられた気分だった。一度軽いため息をついてから、自分の目頭を摘む。

「わりぃ、聞いちゃいけないことだったか？」

哲平が苦笑いで聞いてくる。俺が泣くほど悲惨な境遇でも歩んでき

たと思っているのだろうか、コイツは。強ち間違いでも無かったが。
「孤児だったんだよ、俺」
「・・・・・・は？」
哲平が目を丸くする。
「政府の育児施設に引き取られる、えーと・・・・・・7歳までだったかな。それまでは、路上での生活だよ。物心ついた頃には、途上国の路地にいたんだ。まあ、生き残る為には、色々妥協しなきゃいけないことがあってな。親がいなかったから、俺自身で出した結論。生き残るには『諦め』が肝心。大人の連中相手に食料奪おうとしても、どうせ力で負けて、無駄なエネルギー使うだけだし。黙って食料を恵んでもらうのを待つか、動けるだけ元気だったら自分で探すか。『諦め』ぐせがついたのは、そのせいかな」
哲平はまだ目を丸くしている。数秒フリーズした後、慌てた様子で再起動。
「ばっ、お前何でそんな重要なこと言わなかったんだよ」
「進んで言う話題でも無いだろ？周りに変に気味悪がられるのも嫌だったしな」
数回の瞬きの後、はっー、と哲平がため息。
「お前がそんな壮絶な人生を送っていたなんてなー」
哲平に遠い目で見られる。気持ち悪い。
「なんだよ」
「いや、恭司君に対する感情が１８０度変わったな、と」
「気持ち悪いこと言うな、俺にそんな趣味は無い」
「ちげーよ。同情してるだけだよ」
「してもらわなくて結構」
ん？と哲平が首を傾げる。
「さっきお前、物心ついた時には途上国にいたって言ってたよな。じゃあ何でお前日本にいんの？」
「別に。俺を引き取ってくれた施設が日本にあったんだよ。施設の人が偶然途上国に来ていて、路上で倒れている俺を含めた子供達を

引き取ってくれたってワケ。支倉は施設長の名字だし、恭司だって施設のお姉さんにつけられた。顔立ちはアジア系だけど、俺は何処の国出身か未だに分からないしな」

いつの間にか、船内は俺と哲平だけになっていた。夕日も大分沈み、空は少しずつ闇に飲まれていく。深い沈黙の中、飛行船の駆動音だけが聞こえていた。

俺の話を聞いた哲平は、そっか、と軽く呟くと、完全に沈黙した。

俺の前席に座り直し、こちらからはその表情を伺えない。

両者の間を沈黙が包む。

その耐え難い雰囲気に、俺は思わず席を立った。哲平がどうした、と尋ねてくる。

「いや、今日バイトのシフト入れてるの忘れててな。先に寮に戻っといてくれ」

嘘だった。その場の空気に耐えきれずのとっさの小嘘。

高校に入った際、俺は育児施設を出た。

規定では、１８歳までは施設に残っていてもいいことになっていたが、俺の同期は既に全員施設を出ていたので、俺一人が施設で温々お世話になるのは我慢ならなかったからだ。

現在住むべき家が無い俺と哲平は、学校の持つ学生寮に住んでいる。入寮者の多くは、実家が遠いとの理由だが、１０年前に比べ交通手段が著しく発達した現在では、よほど遠くからの生徒でない限り、寮というものは利用しない。つまり、寮を利用している人はもの凄く少ない。

「バイトって、ああ、あの安時給の工場か」

哲平は手を叩くと、思い出したように言った。俺は若干バカにされているようで、投げやりに応答する。

「悪かったな、才能がない俺には、能力が関係ないあのバイトが合ってるんだよ」

俺も哲平も、国からの生活補助金は貰っている。ただ、欲望旺盛な高校生にはその金額は少々頼りないのだ。俺は箱詰め工場で、哲平

は引っ越し業者。二人とも週の大半はバイトで埋め尽くされている。
俺の言葉に対し、少し考えるような素振りを見せた後、哲平は笑顔で答える。
「ん。分かった。じゃあな」
「おう」

普段通りの、何気ない会話。

特に意味のない、ただの挨拶。

それが、俺が聞いた哲平の最後の言葉であり、俺の非日常の始まりを告げるものだった。

プロローグ　（注：初回2話分掲載）（後書き）

いかがでしたでしょうか。物語は、この次のエピソードでの『少女との出会い』をきっかけに動き始めます。

この作品に投票して頂けると幸いです。←

非現実（前書き）

ここからヒロインが登場します（といってもプロローグでこっそり登場しておりますが）。物語もようやく動きだします。
宜しくお願いします。

非現実

3

哲平は、その日から行方不明になった。
哲平が失踪した日。帰るに帰れず、街で彷徨っていた俺が寮に戻って来たときには、既に哲平はいなくなっていた。
それからはや2週間。
哲平の捜索は続けられている。全く手がかりが出てこないことから、警察の一部では、何処か人目のつかない所で自殺をしたのでは、という見解も出ている。
しかし、俺には哲平が自殺したとは思えなかった。あの、飛行船の中での会話。哲平は確かに、抗う、と言っていた。あの頑固者に、自分の信念を曲げてまで自殺が出来るはずがない。俺が導き出した結論は、そんな単純なものだった。
この2週間は、特に何もやる気が起きず、ボーっと過ごす毎日。適当に学校に出て、適当にバイトをして。
こちらから何度連絡をしても哲平は応答しなかった。しかし、もしかしたらその内哲平から連絡があるかもしれないと僅かな期待を寄せて、肌身離さずケータイだけは所持していた。
今は学校の昼休み。俺は教室で、窓の外を眺めながら一人で昼食を取っていた。他のヤツらからの誘いがあったが、断って一人で食べている。相変わらず何もやる気が出ない。
「しかしまあ」
うるさいなぁ、と心の中で不平を漏らす。それはそうだ。俺が進級してからこの教室で静かな昼休みを送ったことはない。
『マサマサー！可愛いよー！！マサマサー！！』
教室の真ん中を占拠した男子達が、特定の名前を叫び、騒ぎ立てているためだ。『ＩハートＭＡＳＡ』という文字がデカデカとプリン

トされたバンダナを頭に巻き、液晶パネルのスピーカー前で、発光ペンを全力で振り回している。

「放送アイドルね……」

俺は椅子に深く腰掛けたまま呟く。丁度俺が２年生になったこの４月上旬から、何処の誰かが昼休みの校内回線を占拠して、毎日３０分間の校内放送を行っているのだ。その内容はバラエティに富み、近頃のニュースは当然、校内の至る所の情報を掻き集めて話題にしている。放送主は自分のことをマサと呼んでいて、顔は一度も晒されていないが、可愛らしい独特の声をした女子のため男子学生から絶大な人気を誇っている。オシャレに関する放送もしているから、女子にも人気があったりする。特にこのクラスの男子はモテないためか、放送を欠かさず録音しているヤツまでいる始末だった。

「ただ……」

この放送の問題は、外部からという点なのだ。つまり、この『マサ』と呼ばれる女子は、毎日昼休みになる度にわざわざ学校外の何処かで校内回線をハッキング。その後マイクを握っているということだ。完全に犯罪な上、学校側も黙ってはいないのだが、如何せんこのマサと呼ばれる女子のハッキング技術が尋常で無く、かれこれ１ヶ月近く警察が捜査しているのにも関わらず、未だ手がかりの一つも掴めていないというのだ。一体マサと呼ばれるこの女子は、どれほどの高適合者なのだろうか。

一方の俺は、犯罪者の声で踊っている男子達が理解出来ない上、アイドルなどといった類は全くもって興味が無い。だからと言って恋人がいるわけでもないが。もし仮に恋人が出来ようものならば、まず間違いなくこのクラスの男子勢から制裁を加えられる。恋人禁止令というクラス内条約すら発令されているくらいなのだ。

俺は騒がしい男子に視線を送りつつ、購買で買ったパサパサのパンを冷たい牛乳で喉奥に流し込み、しばらく外を凝視しては、深いため息をつく。

季節はまだ春だというのに、昼頃になれば教室の温度もそれなりに

上がる。男子達の騒ぎ声に加えて、一層俺のやる気を削いでいた。
俺は一人机に頭を伏せて、力なく唸る。
今頃、哲平は何をしているのだろうか。哲平はどうして失踪したのだろうか。
そんなことを考えていると、余計に体に熱が溜まる。
別に俺と哲平は、無二の親友ってワケじゃない。関係を聞かれたら、友達以上親友以下ってところだろうか。ただ、哲平の無茶苦茶な行動に付き合っているのは、やはりお互いの境遇が普通ではないからだろう。
高校に入って、最初の自己紹介で最初に哲平が言った言葉は、俺には親がいません、親はモールドに殺されました、だった。クラス中のテンションが一気に下がったのは覚えている。
俺の番になって、俺にも親がいません、俺はモールドに殺されてます、と言ったら、クラス中のテンションがさらに下がったことも、良く覚えている。オマケに哲平だけが笑っていたのも。
哲平が絡んでくるようになったのは、その後だった。
ふと、アイツは俺なんかと絡んでいて楽しかったのだろうか、と思う。
哲平が失踪する前に言ったあの言葉は、的を射ていると思う。俺と哲平は、似ているようで正反対の人間だ。自身の信念を否定するようなヤツなんかと一緒にいて、哲平は本当に良かったのだろうか。
いつの間にかマサの放送は終わっていた。男子勢がぞろぞろと席や ら廊下目がけて散っていく。思いっきり背伸びをした俺は、食べ終わったパンの袋と牛乳パックを捨てるべく席を立った。重い足取りで、教室の外のゴミ箱を目指す。真新しい教室のドアを開き、ワックスがけされた廊下に足を踏み入れようとした瞬間。
ドンッ、と。
俺の耳が、重く響く音を捉えた。
「？」
今の音は、何だったんだろう。何処か別の教室で、派手に机でも倒

れたのだろうか。
大して問題視はしなかった俺は、近くにあるゴミ箱にパン袋と牛乳パックを捨てる。隣の水道場で手を洗い、濡れた手からハンカチで水分をぬぐい取った。
その直後だった。
ドンッ、ドンッ、ドンッ。
先ほどの音が、連続して聞こえてきた。今度は鳴りやまず、音の聞こえる間隔はどんどん狭まる。しかも時間が経つにつれ音は重みを増していき、ついには耳を塞ぎたくなるほどに膨れあがる。
どうやら他生徒も、この音に疑問を抱いたようだだった。クラスにいた女子は会話を止め、寝ている生徒は起き上がる。校舎全体が、一瞬の静寂に包まれたようだった。
この静寂を破ったのは、短く途切れた人の悲鳴だった。
「な、なんだなんだ?」
今の叫び声をきっかけに、教室が一気にざわめきだす。人の叫び声がしたのは、どうやら窓の外のようだ。
俺がいるのは、3階の校庭側の水道場。方角的には、逆方向の中庭あたりだろうか。その悲鳴の正体を突き止めるべく、次々と生徒がベランダに出て行く。俺も慌てて教室に戻ると、賑わうベランダから強引に頭だけを出して、中庭の様子を見た。
悲鳴の正体は、荒瀬だった。
2週間前と比べて、荒瀬の容姿は随分と変わっていた。まず第一に、痩せた。元々痩せてはいたが、残り少ない無駄な肉を全て落とした感じだ。かつてのガッシリとした体格の面影はどこにも見あたらず、小麦色だった顔の表面は真っ青になっている。髪は伸びた代わりに薄くなり、金髪に黒髪が混ざっていた。全体的にげっそりした、という表現が適切だろうか。
荒瀬は何かから逃げるように、何度も転びながら必死に走っている。そして、息切れした状態で口から漏れていたのは、助けてくれ、という言葉だけだった。掠れた声で何度も何度も叫んでは、必死に走

ろうとするが、足が言うことを聞かないようだ。すぐに転ぶ。
ざわめきの中で、一人の生徒が言った言葉が、俺の耳につく。
「アイツか、小杉を自殺に追いやったってヤツ」
なんじゃそりゃ、と心の中で俺。しかし冷静に考えてみると、そんな噂が広まるのも仕方が無いのかもしれない。哲平は荒瀬から暴力を受けた日に失踪しているのだ。大方学校に警察が来て、荒瀬に事情聴取をしているのを目撃したヤツからの適当な憶測だろうが。
荒瀬がげっそりしてしまったのは、哲平を殺してしまったと思いこんでいることから来る罪悪感のせいだろうか。
そんな俺の思考を遮るかのように、他生徒のざわめきが一瞬大きくなる。俺は再び身を乗り出すと、荒瀬とは別に、校舎から新たに人が出てくるのを捉えた。
大杉だ。先日荒瀬に殴られていたのを思い出す。身長は小柄で、横幅がでかい、典型的な肥満体型。適合率は哲平と同程度で、確か２２％だったはず。しかも見るからにひ弱そうだから、荒瀬に狙われるのも無理ないな、と俺は勝手に納得する。
俺の視界の先では、荒瀬がちょうど起き上がったところだった。そして、荒瀬が大杉を視界に捉えた瞬間、目が大きく開かれる。
「うあああああ、来るな、来るなー！！」
再び尻餅をついた荒瀬のすり切れた叫び声が、ざわめきをかき消す。
そんな荒瀬を見た俺は、この状況が大層奇妙なことに気づく。
この状況は、不自然極まり無かった。学年屈指の高適合者である荒瀬にとっては、低適合者である大杉など赤ん坊のようなものだ。だからこそ、苛立ったときはまるでサンドバックかのように扱っていたはず。そんな荒瀬が今、必死に大杉から逃れようとしている。その気になれば片腕だけで地面にねじ伏せられるのに。
溢れる野次馬を押しのけ、何とかベランダの手摺りまで辿りついた。２階、つまり三年生の階のベランダを見てみると、こちらと同じく人で溢れ返っていた。４階の一年生の階も同じく。校庭に生徒の影は見あたらなかったので、いつの間にか全校がこの事態を見守るよ

うな形になっていた。
「うぁ、うぁ、うぁ」
荒瀬の言葉にならない悲痛の声が聞こえる。荒瀬はゆっくり歩いてくる大杉から逃げようと、尻餅をついたまま後ずさる。
校舎全体のざわめきが、いつの間にか消えていた。聞こえるのは、荒瀬の激しい息づかいと、無表情の大杉のゆっくりとした足音だけ。
そしてついに、視界の先で大杉が荒瀬に追いついた。大杉は暫く荒瀬を見下ろすと、乱暴に襟首を掴み上げ、強引に引き起こす。
その行動が引き金になったのだろうか。獰猛な目を大きく見開いた荒瀬は、恐怖を振り払うように叫びながら、大杉を殴ろうと拳を振り上げた。
起伏の大きい荒瀬の右拳が、大杉の顔面を捉えた次の瞬間。
「――――え？」
一瞬、俺は何が起きたのか分からなかった。
大杉が、荒瀬の拳を受け止めたのだ。
左手の人差し指一本で。
「あ、あ、あ」
目の前の光景が信じられないかのように、荒瀬が情けない声を漏らす。
俺の中に確かに存在した不変の現実が、音を立てて崩れていく。
何をしようが、才能の前では無意味。低適合者は高適合者には絶対に勝てない。
そんな、当たり前だと思っていたことが、目の前でいとも容易く否定されてしまった。
俺が放心状態から戻った矢先に。
――荒瀬の右腕が、宙を舞った。
大杉に掴まれた荒瀬の右腕が、肩の付け根辺りからばっさりと切断されたのだ。大杉の手には、刃物などは持たれていない。
大量の血が荒瀬の右肩から吹き出し、ボタボタと地面に垂れる。
その血が頬につくと大杉はようやく、その丸々太った顔の形を崩し

た。
ニヤリ、と。
「がああああああああああああああ！！！」
荒瀬の叫びに一瞬遅れて、全校から悲鳴の渦が巻き起こった。あまりの痛みから地面で転げ回っているようである荒瀬の苦痛の叫びも、その悲鳴でかき消される。
悲鳴の中で、大杉の楽しそうな笑い声が嫌にはっきりと聞こえる。
「ははははははは！！いいよ！いいよぉ！荒瀬君！いつも僕を虐めていた君が、僕の前で這いつくばっている！適合率なんて関係ない！僕はもう、もう嬉しくて嬉しくて！ああ、なんて、なんて気分がいいんだ！！」
その、心の底から嬉しがっている大杉の声を聞いた俺は、全身の鳥肌が立つのを感じた。
混乱する頭を押さえて、今すべきことを必死に考える。俺の中に存在した不変の現実が否定されたことを驚くより、目前の異常な事態を収束させることが先決なのは当然だ。校舎はまだ悲鳴の渦に包まれ、他生徒はあまりに衝撃的な光景から来る恐怖に、目前の状況から目を離せずにいる。誰もこの状況を解決するべく動こうとはしない。
俺は、叫び回る生徒達の間をくぐり抜け、教室を勢い良く出た。長い廊下を全力で走り、階段を目指す。
この事態を収束させるには、まず大人に知らせる必要がある。少年漫画の主人公のように、助けに飛び込むなんてバカな真似をするつもりは微塵もない。最も合理的な方法であるとはいえ、困ればすぐに教師頼りの自分が多少情けなかったが、今はそんなこと言っている場合ではない。
普段使用するエレベータの到着を待っている時間は無い。そう判断した俺は、長年使用されずに寂れている非常用階段を駆け下り、２階に降りた。と同時に、校舎内では新たな悲鳴が生まれる。現在の状況を把握すべく、俺は１階と２階の踊り場の窓から外を覗いた。

血で染まった中庭では、放心状態になっている荒瀬を、大杉が抱きしめていた。少し冷たい風と共に、優しげな大杉の声が入ってくる。
「大丈夫。荒瀬君。君をすぐ楽にするなんて、野暮な真似はしないよ。君が満足するまで、僕がずっとずっと、苦しめてあげるから」
荒瀬の左腕が、激しく潰れた。大杉の右手に、二の腕辺りから握りつぶされたのだ。左腕からも血が噴き出し、再び荒瀬から悲痛の叫びが上がる。
俺は一瞬、強い吐き気を感じた。
コイツは相当、イカレてる。
もう、のんびり状況把握などしていられない。俺は４つ飛びで階段を駆け下りる。不安定な態勢で着地し、危うく転びそうになったのをなんとか堪え、再び足に力を入れる。
職員室は、学校の校舎から大分離れた別館の奥にある。この状況を一切知らないであろう教師に警鐘を鳴らすべく、全力で職員室に向かって走っていると。
「がっ！」
俺は何かに思いっきり足をつまずかせ、勢いよく吹っ飛ぶと、地面に頭を強く打ち付けた。クラクラする頭を持ち上げ、すぐに視界の先の異変を捉える。
「な、なんだこれ・・・・・・？」
１階の廊下や壁に、いくつもの巨大な穴が出来ていた。どうやらさっきの重音は、この穴が出来た時の音のようだ。
大きさは、直径３Ｍくらいだろうか。ほぼ等間隔に、玄関の方へと続いている。
「これ、全部大杉がやったのか・・・・・・？」
俺は、我に返ったように頭を上げる。そして、今自分が呟いた言葉を繰り返す。
全部、大杉がやった？
目の前にあるのは、頑丈なプレートに開いた直径３Ｍもの巨大な穴。しかも穴は相当深い。適合率が５０％を超えてるヤツでも、このプ

レートは貫通できないと聞いていた。
俺はさらに、先ほどの大杉を思い出す。
アイツは一体どうやって、荒瀬の腕を切断した？
大杉は、ナイフなどの刃物を一切持っていなかった。それどころか、荒瀬の拳を押さえた左腕以外、一切体を動かしていない。
いや、そもそも低適合者である大杉に、あんな芸当は出来るはずがない。
現実ばかり考えていた俺の石頭の中で、突如訪れた不可解な現象達が、お互いに激しく衝突する。俺はさらに混乱する。
「と、とにかく、何とかしないと・・・・・・」
取り返しのつかないことになる。頭はそのことだけはしっかりと理解していたようだ。
さっきの転んだ際に頭を強く打ちつけたせいで、視界がぐらつく。不安定な足取りで、何とか俺は玄関を出た。
玄関からの大杉達までの距離は、ざっと１００M前後、といった所だろうか。大杉は荒瀬の首を絞め上げて、気が狂った殺人鬼かの如く笑っている。校舎ではようやく生徒達が落ち着きを取り戻し、警察を呼べだの大杉を止めろだの、この状況を収束させるべく動き始めている。
俺が今すべきことは、教師にこの事態を知らせること。自分の目的を再確認した俺は、ぐらつく頭を押さえ、足に力を入れ、再び駆け出そうとする。
と、その時。
暖かな風が、俺を包んだ。
少しずつその風は密度を増し、高度を下げていくと、最終的には地面で小さな円を描いて徘徊する。
「わっ、わわ！」
地面で渦巻く風に足を捕られ、俺は思わず尻餅をついた。痛む腰をさすりながら、ふと上を見上げると。
一人の少女が、空から落ちてきた。

いや、降りてきた、というのが適切かもしれない。
少女は不思議なくらいゆっくりと落下し、地面間際ではさらに加速度を緩める。
地面に渦巻く風の影響で、チェック模様のスカートや綺麗な黒髪が不規則に揺れる。
そして地面に足が触れるかどうかの辺りで一度空中に静止し、背を向けて俺の目の前に着地した。
「な、な、な」
再び増えた混乱要因に、俺は尻餅をついたまま口をパクパクとさせる。
そんな中、空から落ちてきた黒髪の少女は、ゆっくりと俺の方を振り向いた。
「・・・・・・！」
不覚にも。
こんな状況なのに、俺はその少女に見とれてしまった。
生徒の悲鳴が遠くに聞こえ、その少女以外の視覚的情報が全て遮断される。
容姿端麗とは、まさにこのことを言うのだろう、と俺は混乱状態の頭で思う。黒く澄んだ大きな瞳を初めとする、予め考慮されていたかの如くバランス良く配置された顔のパーツ。
身長は１６０？前後だろうか。すらりと伸びた美しい肢体の上に、この学校の制服を纏っている。同じ制服でも、中身が違うだけでここまで変わるか、と感嘆してしまう。春風に揺れる一本に纏め上げられた黒髪も相まって、まるで一つの完成された芸術品が置かれているようだった。
はっ、と我に返る。俺の後ろにある校舎からは、依然として生徒の騒ぎ声が聞こえる。尻餅をついたまま上を見上げると、大杉の件とは別に、４階の女子達がこの黒髪の少女を指差しながら慌てふためいていた。制服のリボンの色も合わせて考慮すると、この少女はこの学校の一年生で、今は４階から飛び降りたようだ。

確かに、適合率が２０％代の人が飛び降りたらひとたまりもないだろうが、５０％ほどの高適合者となれば、４階程度の高さから飛び降りたとしても大した怪我はしない。予め用意をしてから飛び降りれば、無傷で着地するのもさほど難しくないだろう。
つまりこの少女は、適合率５０％並の超高適合者だということになる。
俺の頭の中での混乱要因が一つ削除された。飛び降りた理由は知らないが、無傷なのは納得できた。
と思ったのだが。
「宮谷さ～ん！大丈夫ですか～！？」
「茜～！大丈夫～！？怪我ない～！？」
校舎の方から、連続して二人の女子の声が聞こえた。どうやら、俺の目の前にいる黒髪の少女は、宮谷茜というらしい。
どこか聞いた名前だなと、俺が脳のデータベースに検索をかけていると、宮谷という少女が上の女子達に笑顔を向けた。
「大丈夫で～す！心配してくれて、ありがとうございま～す！！」
高く、澄んだ声だった。華奢な見かけによらず、意外と大きな声に多少驚く。
そしてその少女は俺を見ると、微笑した。
宮谷茜の微笑を見た瞬間、俺の頭の奥底に眠っていた特定の記憶が、一気に表に引きずり出された。
思い出した。あの、２週間前の日の哲平の言葉が浮かぶ。
宮谷茜、一学年の最低適合者。
適合率は、２１％。

非現実（後書き）

ランキングの方よろしければお願いします。←

ＶＳ　『青』服用者（前書き）

今回は全編バトルです。

ＶＳ『青』服用者

思い出した。あの、２週間前の日の哲平の言葉が浮かぶ。
宮谷茜、一学年の最低適合者。
適合率は、２１％。

バカな、と俺の頭がさらに混乱する。学年一の低適合者が、４階から飛び降りて全くの無傷。ありえない。絶対に、ありえない。
しかし俺はすぐに我に返る。今はこんなことに驚いている場合ではない。物事の優先順位を誤るな、と自分を叱り、起き上がってから職員室を目指して駆け出そうとした。
そして俺の前に立つ宮谷を横切ろうとした際。
足を引っかけられる。
俺は再び吹っ飛び、頭から地面に激突した。再度頭に大きな衝撃を受けた俺は、ユラユラと立ち上がると、背後の宮谷を睨み付ける。
「いったあああああ！！！何すんだよぉ！？」
この状況を分かってんのか、と頭を押さえながら付け足す。
俺の言葉に対し、軽くため息をついた宮谷ははっきりと俺に言う。
「あなたがどこの誰だか全く知らないけど、どうせ教師でも呼びに行こうとしたんでしょ？そんなことしても無駄よ。むしろ迷惑だわ」
さっきの４階の女子達に向けて言った人物とは思えないほど、目の前の黒髪の少女が発する言葉は、口調も内容も激変していた。俺は一瞬言葉を失う。
「ばっ、この状況で助けを呼ばなくてどうすんだよ！このまま荒瀬

を見殺しにしろってか」
荒瀬？と宮谷は首を傾げる。そして誰のことを指しているのか分かった様子で、ああ、と無表情で手を叩く。
「だから、助けを呼ばなくても大丈夫だって言ってるのよ」
今すぐにでも行動を起こすべきなのに、俺は何故か宮谷の言葉に耳を傾けていた。
そして彼女は再び俺に微笑を浮かべると、告げた。
「すぐに終わるから」
「――――あれ？」
突如風を切るような擦れた音が起きると、目の前から宮谷が消えた。
俺は慌てて自分の周辺を見渡すが、彼女の姿は何処にも見あたらない。
「・・・・・・！足音！」
ふと聞こえた足音の方向に顔を向けると、視界の先には宮谷がいた。
そしてまっすぐ。
大杉の方に向かっている。
バカな！と心の中で叫ぶ。どういうワケかは知らないが、今の大杉は超高適合者である荒瀬を軽く捻っているのだ。一学年の最低適合者の華奢な少女がどうにかしようなど、それこそ笑い話では済まなくなる。
俺は思わず駆け出そうとする。こんな混乱したフラフラな状態で、イカレた殺人鬼モドキに突っ込もうなど、普段の冷静で利口な俺が見たらどう思うか。しかし、足に込めた力は分散せず、そのまま一歩目を踏みだそうとすると。
「え？」
俺が宮谷を視野に捉えてから行動を起こす前に、宮谷の回し蹴りが、荒瀬を掴んだ大杉の顔面を直撃していた。その蹴りをモロにくらった大杉は３０Ｍ以上は吹っ飛び、遠くの桜木の幹に激突する。その衝撃で大木は真っ二つに裂け、大きな音と振動を発生させながら荒々しく倒れた。桜の花びらが盛大に拡散する。

「な・・・・・すっ、げぇ」
思わず呟く。と同時に俺は全力で駆け出した。
頭上のベランダで、この異常な事態に生徒達がざわめいている。当然、宮谷茜の異様なまでの力が原因で。
彼女、宮谷茜は一体何者なのか。
最初俺がいた位置から大杉がいた位置まで、１００M前後はあった。しかし宮谷はその距離を僅か1秒前後で移動して見せた。この学校での１００M走の最速タイムが４秒５６である。しかも、ただの蹴りで巨体男子を３０M以上も吹き飛ばしたのだ。尋常な力ではない。
彼女は、学年一の低適合率者では無かったのか。頭の混乱具合は一層激しくなり、頭痛が鳴りやまない。この僅か数分間で、現実と空想が激しく入り乱れ、俺の思考はもはや正しく機能していなかった。
「はぁ、はぁ、・・・・・おい、お前・・・・・・」
たっぷり１０秒以上かけて、宮谷の元に駆けつけた俺は呼びかける。
「あら、アナタも来たのね。ちょうどいいわ、この人お願いね」
笑顔の宮谷は俺の姿を認識すると、彼女の小さな右人差し指を下に向ける。
目の前の光景を見て、俺は再び吐きそうになった。
荒瀬だ。右腕左足を失い、左腕は真ん中から有らぬ方向に折れていた。全身とその周辺の地面一帯が血まみれになっている。辛うじて意識はあるようだが、痛みと出血で、もはや片言も話せない状態だろう。
宮谷は俺に背を向けると、凛とした声で指示を出す。
「さっき救急船を呼んだから。もうすぐ来ると思うから、止血とかできたらお願い」
助かるかもしれないしね、と宮谷は付け足す。
それだけ言うと、彼女はゆっくり大杉の方へ向かって歩き出す。俺は慌てて呼び止める。
「ちょ、ちょっと待てよ！」
宮谷は顔だけ振り向く。俺に一切の興味もないような、無表情。

「お前、一体何者なんだよ。何で低適合者のお前が、こんな力を持ってるんだ？」

そう言いながら、俺は視界の先にある倒れた大木を指差す。俺の言葉に宮谷は目を丸くし、数回瞬きする。そしてすぐにいたずらな笑顔を見せる。

「さぁ？どうしてかしらね。でもどうせすぐ忘れちゃうんだから、教えてあげない」

冷たく俺をあしらうと、彼女は再び背を向ける。すぐに忘れるとは、どういう意味だろうか。俺が彼女の言葉の真意を分かりかねないまま、宮谷は歩き出す。

「お、おい！お前、これからどうするんだよ！」

「お仕事」

そう言い捨てるように言葉を放った宮谷は、足を止めることなく大木の方に向かっていく。

はぁっ？と心の中で俺は首を傾げる。理解不能な出来事が重なり過ぎて、俺の頭はパンク寸前だった。このままだと本当に頭から湯気でもでるんじゃないだろうか。

再来した生徒のざわめき中、俺の耳が擦れた呻き声を捉える。

その呻き声の主は、俺の眼前に倒れている荒瀬だった。荒瀬の存在を一瞬忘れていた俺は、慌てて彼を起こそうと近づき、背中に手を回そうとすると、ベッタリと血が付着した自分の両手の動きを止めた。

――――酷い。

改めて間近で荒瀬の怪我を見た俺は、第一にそう思った。酷い怪我だ。特に腕のついていない右肩と、左足を失った太ももからの出血量が半端じゃない。このままでは、病院からの救急船が到着する前に出血多量で命を落とすだろう。

俺は無意識の内に、これ以上の血の流出を防ぐ為に荒瀬の肩を押さえた。触れた際の痛みからだろうか、荒瀬が短いうめき声を上げる。

「止血するには――――」

縄のような、縛って血流を止められるものが必要だった。保健室にある包帯が全く効果を発揮しないのは目に見えていた。しかし、周りを見渡しても、どこにも縛れそうな代物はない。

俺はとりあえず、学校指定のシャツを脱ぐと、近くの針金で出来たフェンスの先に引っかけた。そして勢い良く引き、シャツを意図的に切り裂く。

俺のシャツはちょうど真ん中から綺麗に裂けた。すぐに俺は荒瀬の傍に戻り、その二つに分断されたシャツの片方を右肩に押し立てると、あらん限りの力で縛る。

そしてすぐに残ったもう片方のシャツを使い、左足の太ももを縛り上げた。これで多少流血が押さえられると思ったが。

「ちっくしょう・・・・・！」

流血の勢いは、ほとんど変わらなかった。シャツのような柔らかい布で縛ったところで、大した圧力にはならなかったようだ。縛ったシャツはじわじわと赤く染まり、荒瀬の顔は確実に青ざめていく。

やはり流血を止めるには、縄のような頑丈な代物が必要だった。しかし、状況からして、この場を離れることはできない。何処にあるかも分からない縄を探している内に、荒瀬は絶命してしまうだろう。

どうする、どうする、どうする。

俺の頭からは、この状況を攻略できるような考えは一切浮かばず、ただ焦りから熱を発している。

他に方法がない俺は、荒瀬の肩と太ももを両手で強く塞いだ。しかし、指と指の隙間からは着実に血が溢れ出てくる。

くそ、止まれ、止まれ。何度も強く願っては、押さえつけている両手にさらに力を込める。しかし、流血の勢いは緩まない。

ふと、どうして俺はこんなに必死になっているのだろう、と思ってしまう。この出血量だ。俺がどうこう足掻いたところで、結果は変わらないだろう。必死になるだけ無駄骨なのだ。

頭の中で、諦める、という俺にもっとも適した言葉が、ゆっくりと浮かび上がってくる。

そうだ、いつもみたいに諦めてしまえばいい。この件だって、別に荒瀬が死んだところで俺が責められるワケではあるまい。完全に大杉の引き起こした事態なのだ。

いつもみたいに成功の見込みが無いことは諦めて、逃避してればいい。そうすれば、絶対に間違った道に足を踏み入れることも無い。

荒瀬の傷を塞いでいた俺の両手から、少しだけ力が抜けた。

次の瞬間。

上から、細長い何かが落ちてきた。それは地面に当たると、小さく跳ねた後動きを止める。

蛇口のホースだ。

思わず上を見上げると、他生徒が俺に呼びかけていた。

「おい、恭司！止血をしたいんだろ、それを使え！俺たちもすぐに行くから！」

俺は、落とされたロープを見る。３Ｍほどの長さがある緑色の物体は、人の手でも千切れられるよう、真ん中に切れ込みが入れてある。

目の前に、助けられる人がいる。助けられる手段がある。

俺は本当に、この状況で諦めるべきなのか。

否。

「うぉおおお！助かった！」

俺はダッシュでそのロープへ駆け出す。掴むとその場で半分に千切った。そしてすぐに荒瀬の傍に戻り、真っ赤に染まった俺のシャツの上からきつく、きつく縛った。

そして少しその場から離れて、傷口を観察する。

流血はほぼ無くなり、多少の血が滲み出る程度になっていた。

「よ、よかった・・・・・・」

助かった。決していい様態とは言えないが、流血が阻止された以上、まず悪化することは無いだろう。後は安静にさせて、救急船が来るのを待てばいい。先ほどの混乱や焦りは嘘のように消え去り、晴れ晴れとした達成感が俺の心を占める。

しかしすぐに、自分の考えを改める。

いや、まだ終わっていない。解決するべき問題が、残っている。
超高適合者である荒瀬を、いとも容易くここまでにしたヤツが。
視線を荒瀬から倒れた大木の方へと向けた次の瞬間。
「！」
凄まじい衝撃波と共に、倒れていたはずの１０Ｍはあろう大木が、まるで小枝の如く勢いよく空に跳ね上げられた。そして、ちょうど一年生がいる４階のベランダ辺りに達したところで、加えられた衝撃に耐えられなかったのか、その大木が内部から盛大に爆散する。
小さな矢の如く降り注ぐ、大木の鋭利な破片の雨に、ベランダ中の生徒から悲鳴があがる。
その破片の雨は四方八方に拡散し、俺の方にまで降り注いできた。
「危ない！」
咄嗟に俺は、荒瀬の上に覆い被さった。背中にいくつかの木の破片が刺さったようで、鋭い痛みが俺の体を走る。
破片の雨は、時間にすれば数秒程度で降り終わった。俺はゆっくり荒瀬から離れ、自分の背中の状態を手探りで確認する。
１０？ほどの木の破片が３本刺さっていたが、どれも浅かった。多少の痛みを覚悟で、背中から引き抜く。
「い！っつ・・・・・・」
少しだけ血が付着したその破片を乱暴に地面に落とすと、俺はすぐに校舎の方を見上げた。
爆散地から大分離れた俺がこの傷だ。大木の間近にいた４階の一年生は、重傷を負っているに違いない。
しかし、そんな俺の予想を裏切るかのように。
「あ・・・・・れ？」
震える一年生達は、全員無事だった。傷一つついている様子がない。
視線を下に降ろすと、ベランダにいた二年生も三年生も、全員が無事だった。
そして視線をさらに下に降ろすと。
「な、なんだこれ・・・・・・」

数千本はあろう鋭利な破片が全て、中庭の地面に突き刺さっていた。
校舎の壁やベランダにいた人には一切刺さっておらず、ベランダから数Ｍ先を境界線に、全てが綺麗に地面に垂直に突き刺さり、校舎と平行に一つの太い直線を描いている。
まるで、ベランダの先に強力な重力場が作られたように。
そしてその数千もの木の破片が突き刺さった場所の左隣りに、黒髪の少女が悠々と立っていた。俺との距離はおよそ２０Ｍ。
「宮谷！」
俺が立ち上がり、少女に駆け寄ろうとすると。
ドンッ、と空気が揺れた。俺の視界前方から押し寄せてくる厚い空気の壁に全身を押され、勢いよく尻餅をつく。そして、大木があった場所から、一人の少年がゆっくりと起き上がる。
大木の下敷きになっていたはずの大杉だ。怪我らしき怪我は全く見あたらず、その代わりシャツとズボンは大きく破れ、そこから肌が露出していた。
大杉の肌の色を見た俺は、鳥肌が立つのを感じる。
そこから伺えた大杉の肌は、人間味ある肌色ではなく、炭のような黒色をしていた。手足を含め胴体全てが黒に染まり、唯一首より上だけが黒色に変化していない。
「ああもう、イタイな～。せっかく人が楽しんでいたのに」
そう言いながら、大杉は蹴られた自分の頬をさする。
にやにやと笑う大杉に、正面１０Ｍの距離に立っていた宮谷が凛とした声で聞く。
「大杉誠さん。少々質問をしたいのですが」
「何？」
「アナタは何処で『青』を手にいれたんですか？誰かに貰ったんですか？」
「そんなの言うわけないじゃん。ダメだよ、この『青』は、僕だけのものなんだから」
頭を掻きながら、面倒臭そうに大杉が答える。

『青』とは、一体なんのことだろうか。
確かに、宮谷と大杉は『青』と言っていた。もしかしたら、二人の並外れた力に関係している何かなのだろうか。
後ろからでは表情は分からなかったが、宮谷は少し俯くとスカートのポケットから透明の液が入った、5?程度のカプセルを取り出す。
カプセルを持った腕を前に伸ばし、それを大杉に見せる。
「今ならまだ、間に合います。コードからの情報がアナタの体を蝕みきる前に、早くこの『緑』を」
その様子を見た大杉は、一瞬目を大きく見開くと、腹を抱えて笑い出す。
「あ、あ、あっはははははははは!!何言ってんの!?バッカじゃねぇの!?せっかく手に入れた力をわざわざ捨てるヤツがいるかよ!あっはははは・・・・・・」
大杉は笑い続ける。そして笑いの最中に。
激しく吐血した。
「がはっ!ゴフッ!ぐ・・・・・・ぁぁあああああああああああああ!!」
耳を劈くような叫び声と共に大杉は地面に倒れ伏せ、かっ、かっ、と短い音を発しながら、頭を抱える。
そしてついに、首の付け根から大杉の顔全体までもが黒色に変色していく。
大杉の体が完全に黒色に変化した後、全身から煙りが出始めた。ジュウウウッといった何かが溶けるような音と共に、大杉の体がみるみるしぼんでいく。野獣のような呻き声を発した大杉は、ゆっくりとその場から立ち上がった。
なんだ、アレは。
大杉が身に纏っていた服は全て溶けて無くなり、その全貌が周囲に晒される。黒一色の肌に、大きく見開かれた白目。体は骨と皮だけを残したかの如くやせ細り、赤色に変色した髪は地面に付くほど伸びて、風にゆらゆらとなびいていた。

俺の目の前にいるのは、果たして大杉なのか。いや、あの状態を人と呼んでもいいのだろうか。その変わり果てた異形の姿を見たベランダの生徒が、再び騒ぎ始める。

「そう、またダメだったのね・・・・・・」

俺の前方にいた宮谷が、通信機らしき物をスカートのポケットから取り出すと、左耳に当てた。

「こちら宮谷。対象の浸食が第3段階に突入したのを確認。対『青』用ワクチンの使用は不可能と断定。対象の殲滅と、イレイサーの使用許可を求む」

何だ、宮谷は誰と会話しているんだ?

視界の先で誰かと通話している宮谷に、俺が声をかけようとすると。突如大杉が、雄叫びを上げた。

近くの大気が全て大杉を中心に集まり、一気に放たれた感じだ。超高圧力に桜の葉が大きく舞い上がり、大地が揺れ、窓ガラスが次々と割れる。短く切れた悲鳴を上げると、ベランダにいた生徒は次々と教室に逃げ込んだ。

「うおおおおおおおっっ!!」

あまりの空気の圧力に、俺は前を見ることが出来ず、体がピリピリと震えるのを感じる。前屈みになり、後ろに吹き飛ばされそうになるのを必死で堪える。

ふいに、俺は荒瀬のことを思い出す。

この状況でケガ人を外に放置しているのはマズイ。超現実主義者かつ合理主義者である俺が、自分の身よりも他人の身を心配しているのが少々驚きだったが。

顔だけ後ろを向くと、そこに荒瀬はいなかった。

一瞬吹き飛ばされたかとも思ったが、既に教室から駆けつけたクラスメイト数名が協力して荒瀬を校内に連れようとしているのを視界に捉える。

安心した俺は吹き飛ばされないように気をつけながら、顔を正面に戻し、後ろに後退しようとすると、僅かに開けた視界に、今度は宮

谷の姿を捉えた。
宮谷は、この超高圧力をものともせず、平然と立っていた。そして、左耳に掌を重ねて、じっとしている。
ふっ、と。この圧力が収まった。俺は思わず前に転びそうになり、足で踏ん張って耐える。
次の瞬間。
雄叫びを終えた大杉が、目の前の宮谷に襲いかかった。１０Ｍもの距離を一瞬で縮め、真っ黒に染まった右拳を荒々しく振り上げる。間一髪で宮谷が横に飛んで避けると、そのまま大杉の拳は地面に叩きつけられた。
衝撃が、俺の足下を走り抜ける。大杉の拳は、大地に直径５Ｍほどの巨大なクレーターを作り、その際、中庭全体に放射状の細い亀裂が走った。
獣の呻き声のような声を発し、横にいる宮谷を視界に捉えた大杉は再び襲いかかる。振り下ろされる拳を宮谷は避けると、大杉から距離をとる。
その時だった。
「対象の殲滅と、イレイサーの使用許可、確認しました」
無表情の宮谷はそう呟くと、耳から通信機を取り外す。両手を後ろに回し。
スカートの中から、二丁の拳銃を取り出す。宮谷は拳銃を大杉に向けると、躊躇い無く引き金を引いた。
二つの銃口が火を噴き、その際に発生した轟音が空気を震わす。
しかし弾丸は、大杉の体を貫通することは無かった。
「え・・・・・？」
俺が驚きのあまり声を漏らす。宮谷が撃った２つの弾丸は、大杉の腹に当たるとそこで進行を止め、力なく地面に落下した。
「皮膚が、弾丸を通さないほど硬質化しているのか・・・・・？」
真っ黒に染まった大杉の体を眺めながら、俺は小さく呟く。
常人なら卒倒してしまいそうな異常事態からすぐに回れ右をして全

力逃走をしたいところであったが、俺の足は驚き7割、恐怖3割で全く言うことを聞かなかった。
まるで瞬間移動をしているかの如く、再び大杉は超高速で宮谷に殴りかかる。宮谷は軽い物腰でその攻撃を跳んでかわしつつ、背後から上下逆さまの状態で銃を連射する。
しかし今度は本体に届くどころか、カッ、という短い咆哮だけで弾丸の勢いが殺される。金属音を鳴らしながら、動きを止められた数発の弾丸が地面に落下した。
空中で一回転して、片膝を着いて着地した宮谷は小さい舌打ちをした後、再び接近した大杉の拳をかわし、身軽なバックステップたった2回で大杉から２０M以上もの距離をとった。
そして、多少震える俺の隣りに並ぶような形になる。
獲物を取り損なった野獣の如く唸った大杉は、真っ黒の左腕で右の二の腕を掴む。流れる風に赤色の長髪がなびく。
俺の視界にさらに信じがたい光景が飛び込んできた。
大杉の黒い右腕が、その形を崩し始める。そしてゴキゴキという、骨が折れるような鈍い音を発しながら、ある一つの形に収束した。
大杉の右腕が、細長い槍にも似た黒色の剣に姿を変えたのだ。
再び雄叫びを上げた大杉が、宮谷と俺に向かって突進する。
いや、目視できたワケではない。気がつくと、いきなり目の前に大杉がいたのだ。俺の左隣りに立っている宮谷の懐に入り込み、右腕が変化した鋭利な剣を一閃するべく構える。
その一連の動きだけは、やけに遅く視界に入ってきた。
宮谷！心の中でそう叫ぶ。しかし宮谷は銃を構えるどころか、その場を動こうとさえしない。
胴体を真っ二つに斬られる宮谷の姿が頭に浮かぶと、ついに大杉の剣が振られた。
次の瞬間。
「ガッ！」
突如大杉が、何らかの圧力によって地面に押し潰された。何らかの

力が継続して働いているのだろうか、大杉は地面から動くことができないようだった。ベキベキッ、という大地が砕ける音を発しながら、大杉もろとも周辺の大地が半球状にくり抜かれていく。

そんな大杉を哀れむような表情を見せた宮谷は、俺の目の前で地面に押し潰されている大杉の近くにしゃがむと、優しい口調で話しかける。

「許してね、大杉君。君はもう、人じゃないのよ」

だから、と宮谷は呟き、目を閉じる。右手の銃を、大杉の後頭部につけると。

引き金を引いた。

バギッ、と。ゼロ距離で放たれた弾丸により、硬質化した皮膚が貫通される音がした。

ＶＳ　『青』服用者（後書き）

応援の方、宜しくお願いします←

イレイサー（前書き）

今回は短めですが、かなりの伏線が散りばめられております。

イレイサー

バギッ、と。ゼロ距離で放たれた弾丸により、硬質化した皮膚が貫通される音がした。

同時に、大杉はその場で完全に動かなくなった。
その真っ黒の全身から、真っ黒の液体が滲み出す。
血、だろうか。
「――――はっ！」
俺は我に返ると、思考を止めていた頭を無理矢理働かせ、目の前で起こった状況を把握する。
宮谷が、野獣のように変わり果てた大杉を、殺した。
間違いない。この黒髪の少女が、こんな華奢な少女が、人を殺した。
多量の混乱要素が頭の中で大戦を始めている中、この揺るがない事実を俺は素直に受け入れようとする。

当然、受け入れられなかった。
「わあああああああああああ！！！」
情けない叫び声を上げて、俺はその場で後ろ向きに転けると、全力で後ずさりする。そして震える指で宮谷を指差す。
「お、おま、お前何、な、何やって、て！ひ、ひと、ひとを、こ、こころ、ころしししし！！！」
言葉が言葉にならなかった。そんな慌てふためく俺を宮谷は無表情のまま一瞥すると、スカートのポケットから何かを取り出す。
ピンク色のボールペンだ。何故この状況下でそんな代物が登場するのかを頭でじっくり考察するほどの余裕は、今の俺には断じて無い。
宮谷は、イレイサーやると独りごちてるみたいで恥ずかしいのよね、とボールペンを顔の前に持ってきた。軽く咳払いをした後、細長い

物体の上端を押しながら、謎の言葉を一気に吐き出す。声量が小さく、何を呟いているのか分からなかったが、最後の一言だけはしっかりと聞き取ることが出来た。

「イレイサー、オン」

直後、ボールペンから激しいフラッシュが3度に渡り発生する。同時にサイレンのような、耳に障る高音が大音量で放たれた。

思わず両耳を塞ぐが、爆音は両手の存在を気にも留めないかの如く、鼓膜を激しく震わす。

耳障りを通り越して、痛いと感じる程の爆音。

時間にして、5秒弱。サイレン音は少しずつフェードアウトしていき、収束を迎える。

「あれ？」

あまりに奇怪な現象に、俺は思わず疑問の声を上げる。

両耳から掌を離すと、世界は全くの無音に包まれていたのだ。

あれだけの騒音を放っていた校舎は、完全に沈黙していた。ふと校舎を見上げると、ベランダに残っていた生徒は全員、気を失ったかの如くその場で倒れ伏せている。壊された窓から見える、荒瀬を校内に引き入れた生徒も同様に。

視線を前方に戻す。

視界の先では、背を向けた宮谷が大きな背伸びをしていた。

両手を上に伸ばし、気の抜けたあくびをし終えた宮谷は体ごとこちらを向き、眠そうな目で俺を視界に捉えると。

固まった。

両者とも固まったまま、数秒が過ぎる。そして最初に口を開いたのは、宮谷だった。

「あ、あああなた、あなたななんで、な、なんで、え？あれ！？どどどどうして！？効いてない！？」

慌ててボールペンを取り出した宮谷は、両手で握りしめるその桜色の物体と、尻餅をついたままの俺を交互に忙しく見る。

「えっと……」

「な、何で?故障?イレイサーが?」
「あ、あの〜」
「でも他の人にはちゃんと効いてるし、雅美への指示内容にも含まれてないはず……」
「お〜い、聞こえてるか?」
完全に状況を把握出来ていない俺が何度も話しかけていると、ようやく俺の存在を再認識したのか、一瞬反応を見せた宮谷が突如早足で接近してきた。目前まで近づくとその場にしゃがみ、怪訝な表情を浮かべながら俺をまじまじ眺め始める。
「な、何でしょうか・・・・・・?」
ハハハ・・・と力なく苦笑いする俺。宮谷との顔の距離、約10?。あまりに端整な顔立ちで直視できず、思わず目を背けたくなるが、宮谷の大きな瞳で見つめられると何故だか視線を逸らすことができない。
互いの吐息が当たるほどの近距離で、俺が先ほどとは別の意味で困惑していると。
「アイタタタタタタ!!」
宮谷に右頬を抓られた。
あにふんだ、とマヌケた声を出して俺は宮谷の手を乱暴に払う。それに一瞬反応した宮谷は小動物のようで、先ほどまでの覇気は完全に失われていた。
「あ、あなた、どうして気を失ってないの?」
「どうして俺が気を失わなければならないんだ?」
立ち上がって不思議そうな表情で眺めてくる宮谷に、俺は頬をさすりながら答える。
しかし放心状態から数秒して、宮谷の表情が一変した。目を大きく見開くと、再び腰から拳銃を取り出す。
「おわっ!」
「動かないで」
宮谷は俺の額に銃口を押しつける。先ほどの抜けた表情とは打って

変わって、鋭い表情を晒しながら凛と言う。
「どういう理由なのか知らないけど、コードに纏わる情報の漏洩を防ぐことがＩＣＤＡの最優先事項」
悪いけど、と宮谷は短く挟む。
「死んで貰うわ」
「え、は！？ちょっ、ちょっと・・・・・・！」
鈍く輝く銃口が目の前に。
その拳銃を掴む宮谷の腕からは震えのような、とにかく殺すことに対する抵抗と呼べるような色は一切伺えなかった。
さて、彼女は一体何をしているのだろう。
彼女が大杉を殺した。その事は確かだ。大杉は荒瀬を殺すことに躊躇いのような素振りは一切見せなかったし、宮谷が殺してでも大杉を止めようとしたことは、納得は出来なくても、まだ理解は出来る。
だが、俺が一体何をした。
荒瀬を助けようとした。大杉に向かった宮谷の身を案じた。
この状況下で、少なからず賞賛されるべき行動をしていたではないか。
それに対する対価が、死？
理不尽を通り越して、最早失笑しか無かった。
俺の視界の先で、宮谷の引き金に乗った人差し指に力が入る。
「なんなんだよ・・・・・ホントに撃つ気かよ・・・・・・」
何故こんなことになったのか。ただの日常から、いきなりワケの分からない非日常に巻き込まれて。
俺は両目を瞑ることさえ出来ない。そしてあまりに唐突な、静かな死への覚悟も出来ぬまま――――。

スチャッ、と。

「――――？」
恐る恐る目を開くと、宮谷は銃を降ろし、俺に背を向けた。

――――その際に、俺に送られる哀れむような視線。

「――――」

何か言いたそうな、けど躊躇うような雰囲気を滲ませ、宮谷は数秒ほど俺に背を向けたまま立ち止まっていた。

そして小さなため息をきっかけに、そのまま早足で歩き出す。

「お、おい」

恐怖で震える声で、何故か俺は宮谷を呼び止めようとする。

本当に死を免れたのか、まだ彼女は俺を殺す気なのではないのか。

そういった疑問が全身を絡め取り、俺は震えることしか出来ないのに。呼び止めてしまったからには、俺の身に降りかかる危険も増す。

願わくば彼女が俺の呼び止めを無視してくれれば。

という期待を裏切り。

宮谷は足を止めると、少しだけこちらを振り向く。それだけで俺はビクッと体を震わせる。

「命拾いしたわね。死にたくなかったら、後で私の所に来なさい。話があるの」

「は！？話って……」

宮谷が俺に背を向け歩き始めたと同時に、ベランダで倒れていた生徒達が一斉に意識を取り戻した。校舎の中を見ると、荒瀬の周辺の生徒も同じく。皆この場に混乱した様子で周囲を見渡している。

俺は再び視線を前方へ戻す。

しかし、そこに宮谷の後ろ姿は無かった。

遠くでは救急船のサイレン音が鳴り響き、後ろを振り向くと教師達が騒ぎながらこちらに走ってきていた。

イレイサー（後書き）

第1章、『Fの出会い』編、完結です。次から物語が本格的に動き出します。
ランキングの方登録しました。気に入って頂けましたら、投票の方宜しくお願いします。←

会いに来い（前書き）

タイトル『Fの軌跡』通り、こっから内容を掘り下げていきます。

会いに来い

―第２章―

1

その日、予定されていた時刻よりも大幅に早く放課後が到来した。
それはそうだ。学校のど真ん中で、あんな事件が起きてしまったのだから。今日は生徒を家に帰し、以後３日間を休みにする。これが、事件でショックを受けた生徒達への学校側からの措置だった。
その後駆けつけた救急隊員によって荒瀬は病院へと搬送された。救急船内からの連絡では、衰弱してはいるが命に別状は無く、切り取られた右腕と左足もくっつくとのことだった。
そして今は早すぎる放課後。太陽はまだ大地を神々と照らしている。普段ならば午後の授業の時間帯なのだ。保健室で背中の傷を手当してもらい、体中に付着した荒瀬の血を落としてから予備のシャツに着替えた俺は、学校の正門前で壁に背を着いて呆然と空を見上げている。学校側からはすぐに家へ帰るよう指示が出ており、事件発生後１時間以内に全生徒が学校外に追い出されたが、今は呑気に寮などに戻っている場合ではない。
俺はまず混乱する頭を押さえて、それから現在の混乱要素を全て脳裏に書き出す。
混乱要素その１。大杉。超人的な力を与える、モールドの恩恵をあまり受けられない彼が、どうやって高適合者の荒瀬に勝る結果となったか。
混乱要素その２。大杉。あの変わり果てた、真っ黒の獣のような姿はなんなのか。
混乱要素その３。宮谷。大杉に同じく学年屈指の低適合者である。そんな少女が何故あんな異様じみた力を発揮したのか。

混乱要素その４。複数回に渡って発生した、あの謎の圧力。鋭利な破片の雨から生徒を守り、最後は大杉を地面に押さえつけた、あの力。あれは一体何なのか。

混乱要素その５。宮谷。人を殺しちゃったよ。

混乱要素その６。大杉と宮谷。二人の言葉に含まれていた、『青』、『イレイサー』、『コード』、『緑』、『ＩＣＤＡ』。これらの謎の単語が指す物とは？

そして、混乱要素その７。

俺を除くその場にいた全ての人物が、記憶を書き換えられている。彼らは今日の事件を、全て学校に侵入した通り魔の仕業と思っている。その通り魔は『荒瀬と大杉を襲い、ご丁寧に校舎の窓ガラスを全て割って桜の木を切り倒し、小型爆弾で大量のクレーターを造ってから逃走した』そうで。もし本当に存在するなら、何とも意味不明な殺人鬼ではあるが。

それに加え、ベランダで真実を目撃していない生徒と教師の記憶まで書き換えられ、全員がそのことを納得しているのだ。

そして、どうして俺だけ記憶が書き換えられていないのか。

これまでの話から推測すると、恐らく宮谷はあの『イレイサー』と呼ばれた、ボールペン状の物体を使用して他者の記憶を改竄していた。だが彼女は俺が意識を失わない、つまり『イレイサー』の影響を受けていないことを大層驚いていたのだ。それはつまるところ、俺という人間が彼女にとって想定外だったということになる。俺の記憶が書き換えられていないのは、宮谷の意志では断じて無いのだ。

「どうしたもんかな・・・・・」

分からないことだらけで今にも頭がパンクしそうだったが、この場でこれ以上思考を巡らせても、良い結果はあまり期待できそうに無い。太陽からの恩恵を存分に受け、俺は背伸びをする。そして。

「アイタタタタタタ！！！」

背中に鋭い痛みが走り、俺はその場にうずくまる。浅いとはいえ、一応傷と呼べる傷を作っていたことを完全に忘れていた。

うずくまった際に保健室で巻かれた包帯が傷口からズレた感触を感じつつも、俺はその場にゆっくりと起き上がってから次の行動を考える。といっても、何をするかは決まっていたが。

「宮谷はどこに行ったか」

俺は自分の周囲を見回す。が、俺の周囲には人一人いなかった。俺は当然、宮谷を捜している。別れ際、死にたくなければ会いに来い、と宮谷が言っていたのを思い出したのだ。とは言っても。

「どうやって会いに行けばいいのだろうか」

俺はつい数時間前まで、宮谷という存在を全く気にしていなかった。知っていたのは、宮谷茜という名前と、彼女が一学年の最低適合者であるということだけ。しかもその記憶すら、脳の奥深くに沈んでいたのだ。だから当然、彼女の自宅はおろか、帰り道さえ知らないのである。

大体会いに来いって、俺に用があるなら自分で来いよな、と少女への不平を鳴らしつつも、何とか宮谷と接触するための手段を考える。まず一つ目は、学校の事務室に行き、宮谷茜の自宅の電話番号を聞くという方法がある。

「けどな・・・・・」

俺は正門の隙間から校舎の中を覗く。中庭辺りでいつの間にか集まってきた警察数十名が、鑑識やら何やら忙しく動いていた。学校の事務員も偽りの事件の後処理に追われているのだ。自宅に帰れ、の指示も相まって、まず俺の要求など聞かないに違いない。ならいっそのこと、学校のシステムをハッキングして、宮谷茜の個人情報を盗みだすか、とも考えたが、第一俺はそんな高度な技術を持ち合わせていない。その上仮に成功したとしても、すぐに目の前の方々のお世話になるのは目に見えていた。

二つ目は、このまま会いに行かず宮谷を待つ、という方法だ。これならば確実に宮谷に会えるし、わざわざこちらから出向く手間も省ける。そして、俺の命も確実に奪われる――。

「本末転倒じゃないか！」

自分で自分にツッコミを入れる。何故俺は、観客ゼロの中で一人コントをしているのだか。
しばらく考えてもいい方法は浮かばず、俺はある覚悟を決める。
「こうなったら・・・・・・」
右手に持った学校指定鞄から、俺は携帯電話を取り出す。約５０名がアドレス帳登録されたこのケータイで、宮谷茜に行き着くまでメールアドレスを聞いて行くのだ。
理想としては、５０名の中で一年生女子のメアドを持ってそうな人↓一年生女子↓一年生の女子で宮谷茜の友達↓宮谷茜といった感じだが、これはあくまで理想。完全に運任せなのだから、実際に実行すれば聞く人数は十人を超えるだろう。最初の人物はともかく２人目以降は当然、見ず知らずの人に他人のメアドを譲渡するのを嫌がるはず。その点については、『宮谷茜に告白したいから、教えてください』とでも書けば大丈夫だろう。俺の平凡な学校生活を引き替えに。恋人禁止令を破った罰として、ほぼ間違いなく野生児達から制裁が下される。
俺はこの覚悟が薄れない内に、自らのケータイを開く、と。
「あれ？」
俺の携帯に、差出人不明のメールが一通届いていた。送られてきた時刻は今から１時間程前。
俺は迷わずそのメールを開く。
メールの内容は、以下のようなものだった。
『宮谷です。３時半までに、第２５管区エリア１の駅のホーム前に集合。１秒でも遅刻した場合は処刑』
宮谷が示す場所までは、公共の飛行船を利用すれば３時間はかかるほど距離が開いていた。
俺は左腕のデジタル時計を見る。現在時刻は２時５分を回ったところだった。約束の時間まで１時間半もない。
これは。
「死ぬかもしれないなぁ・・・・・・」

そう悟ったように呟いた俺は、次の瞬間全力で駆け出していた。

会いに来い（後書き）

ランキングの方、宜しければクリックお願いします←

会いに来た

2

そして経つこと約８０分。俺は必死に第２５管区エリア１の駅内を走っていた。時計を見ると、現在時刻は３時２９分１３秒。約束の時間まで残り１分を切っていた。

「うあぁあ！！どいてどいて！」

混み合う人を避けるようにしながら俺は走る。

人とぶつかりそうになっては避け、逆流に押されまいと必死に抗う。不特定多数の他者に睨まれるが、そんなもの気にしている場合ではない。

モールドが登場した際、世界中の地名が一斉に廃止され、代わりに各国に１から１９８までのナンバーが割り振られた。日本のナンバーは１５だ。ただ、１５年が経った今でも、ナンバー１５と呼ぶ人はあまりいない。俺もそうだが、大抵の人は普通に日本と呼んでいる。

さらに日本では北から南まですべての土地が、３８個の管区に再分割され、それぞれの管区では平均４２個のエリアにさらに細かく分割されている。

例えば、俺の学校は第２１管区のエリア１２から１３にまたがって存在している。俺と哲平がいた寮は、同じ２１管区のエリア３２だ。第２０管区から２５管区までは、昔は関東地方と呼ばれており、今では日本でもっとも経済活動が活発な場所となっている。

また、エリアの数字が若い方が、より都会的であると言ってもよい。例え第２０管区から２５管区の中であっても、一番数字がデカいエリアに行くと視界に入るのは荒れた山だけで、民家なんてものは一切見あたらない。

逆にエリア１などの都会では、人目につかない場所が存在しないほ

ど、日中の人口密度が高い。
つまり日中まっただ中の今、第２５管区のエリア１にいる俺は、日本で一番混雑した場所に立っていることになる。
「うぉおおおおおおおお！！！」
俺の目指す方向とは正反対の方角に流れる人混みに捕まり、俺は危うくエリア２行きの飛行船に乗ってしまいそうになった。全員が俺よりも適合率が高いワケで、当然適合率が０％の俺がその流れを押し戻せるハズがなく、あらん限りの力で横に脱出する。
モールドの登場から５年後を機に、交通面での技術が大幅に向上し、それからさらに１０年経った今となっては、全てのエリアに公共の飛行船が通っている。とくにエリア１では、２０秒置きに新しい飛行船が来たりもする。しかし、俺は約束の時間に間に合わないとのことから、専用空路を持つタクシーを利用してここまで来たのだ。そのおかげで月の食費の半分を失うことになったが、自分の命には代えられない。
低い態勢で人混みをかき分け、なんとか駅のホームに出ることができた。荒く息をしながら、時計で現在時刻を確認する。
３時２９分４８秒。約束の時間まで残り１２秒。
良かった、間に合った。俺は思わず安堵のため息を漏らす。
そして時計から視線を目の前に戻すと。ニッコリ笑顔の宮谷が、目の前にいた。
「うひゃあ！」
情けない声と共に尻餅をつく。俺と宮谷の周りでは、スーツ姿の人々が忙しく行き交っており、俺たちの様子を気にする者はいない。
「どうしたんですか？変な声だして」
宮谷は昼間と同じく制服姿だった。纏め上げられていたポニーテール状は解かれ、美しい黒髪は肩の下辺りまで垂れ下がっていた。満面の笑顔を見せる宮谷は、右腕につけられたピンク色の腕時計を確認する。
「ずいぶんとギリギリですね。何処かで道草でも食ってたんですか

？」

んなワケねーだろ、と立ち上がる。俺はようやく落ち着くと、宮谷にはっきりと言った。

「ていうか、そのクラスの女子と話すときの猫被った話し方止めろって」

なんか鳥肌が立つ、と口で言ったら殺されそうだったので、心の中で呟く。俺の言葉に対して、宮谷は直視できないほどの満面の笑顔で答える。

「え～、猫被ってるって、どういうことですか～？私はいつもこんな感じですよ？」

「・・・・・そっすか」

どうやらコイツはいつも表面では、この優しいお嬢様キャラで押し通しているようだ。しかし裏では、記憶を書き換える装置を使って、今日のようなことをしているのかもしれない。

今日のようなこと――。

とそこで俺は今日の出来事を思い出すと、酷く寒気を感じた。慌てて話題を変える。

「で、でさ、話って何だよ？」

諦めモード発動の俺は、目を背けて頭を掻きながら、ニコニコの宮谷に聞く。そんな俺に対して宮谷はいきなり俺の右手を掴むと、俺をひっぱりだした。

「まあまあそう焦らず、恭司君。それじゃ、行きましょうか！」

「はい？何処へ？」

一拍置いて、笑顔の宮谷は言う。

「ひ・み・つ♪です！」

ピキッと。

世界が割れる音がして。

どうしてだろう。こんな可愛い女の子に手を引っ張られて急かされるなんて夢みたいな出来事が起きてるのに、鳥肌が収まらないや。

固まったままの俺は、笑顔の宮谷に引きずられながら駅のホームを

出た。

会いに来た（後書き）

気に入って頂けましたら、ランキングの方宜しくお願いします。←

Ｄａｔｅ　ｏｒ　Ｄｅａｄ　？　～デートか死か～（前書き）

話の構造上、本日は２本更新します。２本目は番外編となります。
更新は夜８時頃を予定しております。お時間よろしければ是非ご覧下さい。シリーズを通して、最重要キャラである２人が登場します。

Ｄａｔｅ　ｏｒ　Ｄｅａｄ　？　～デートか死か～

３

しばらく都会の街を歩いていると、少なからず俺が注目を浴びているのが分かる。時刻は現在４時前後。この時間帯になれば、下校時刻が早い学校の生徒はちらほらとその姿を街の中に見せ、高層ビルが立ち並ぶ景色の下にいる街の人々の服も、スーツ一色からカジュアルな物に変化しつつあった。

よって俺や宮谷のような高校生がいても大して目立たないはずなのだが。

街ゆく男子学生共には恨みと羨望の眼差しで見られ、通りかかった女子高生達からは憧れのような視線を頂戴する。原因は、俺の右手に笑顔でしがみついている宮谷だった。眩い笑顔で楽しそうに鼻歌を歌っている。端から見れば、ちょうど二人で仲良く並んで歩くバカップルだった。しかも片方は黒髪の超絶美少女で、片やそのお相手はイケメンでもブサイクでも無い普通の高校男児である。注目を浴びるのも仕方がなかった。

俺はため息をつきながら、右腕にしがみついて離さない宮谷に言う。

「おい、３回目だ。俺から離れてくれ。傍を歩くなとは言わない。頼むから俺の手を解放してくれ」

腕が壊死するから、と小さな声で付け足す。俺の右腕は３０分近く笑顔の宮谷にぎゅーっと握られ、崩壊を来そうとしていた。握力が尋常じゃない。一体この華奢な体の何処からそんな力が生まれるのか、不思議でならなかった。

右隣から３回目の同じ返事が返ってくる。

「え～、いいじゃないですか。私達、恋人なんですよ？昨晩はあんなに私を押し倒したクセに」

近くでコーヒーを飲んでいた４０代独身と思われるオジさんが、宮

谷の言葉を聞くや否や盛大に吹き出した。俺は頭の中で、３回目の同じツッコミを入れる。
俺たちいつから付き合ってるんですか。後宮谷を押し倒した記憶は神に誓って微塵も無い。
「４回目だ。腕を解放してくれ」
俺の言葉を聞いた宮谷は瞳をウルウルとさせ、俺に上目遣いで話しかけてくる。
「恭司君、わたしのこと・・・・・嫌いですか？」
「現時点ではね」
いくら絶世の美少女だとしても、宮谷が人一人を殺していることは紛れもない事実。超現実主義者かつ合理主義者の俺が、血で汚れた笑顔を見せる美少女と一緒に町中を歩きたいとでも思っているのだろうか。
そんな俺の言葉を無視するかの如く、宮谷はいきなり自分の右を見ると、あ～！と可愛らしい声を上げた。
「クレープです！恭司君、クレープ屋ですよ！」
宮谷が右で停船しているクレープ屋を指差し、興奮している。
「そうだね」
俺は適当に答える。というか、腕の痛みでそれどころではない。
「私、実は甘い物大好きなんですよ」
「そうだったのか」
「私、食べたいですよ」
「買えばいいじゃないか」
「恭司君。彼氏として奢ってください」
「色々ツッコミたいところだけど、敢えて嫌だと言っておく」
ゴキッ。
「是非とも私目に奢らせてください」
「わー、ありがとうございます、恭司君！」
たかだか数百円の出費で右腕の命を救えるのならば安いものだ、と内心で俺。

宮谷は俺の右腕を解放すると、綺麗な黒髪を揺らしながらクレープ屋へ駆けていき、前屈みになってサンプル品を眺める。俺は少し遅れて、なるべく宮谷から距離を取ってクレープ屋に着いた。

「ここのメニュー、全部ください」

笑顔の宮谷から、恐怖を具現化したかのような言葉が発せられる。

俺は思わずメニューのカバーガラスに頭をぶつけた。かしこまりました、少々お待ちください、と宮谷の言葉に対して律儀に応答した店員は、船内の奥の方へ駆けていくと、クレープの作成準備に取りかかる。

「ちょちょちょい、待ち！おい、宮谷！お前ここの店のクレープ何種類あると思ってるんだ！」

慌てて宮谷に駆け寄り、店のメニューを横から一瞥してから俺は文句を言った。

ゴキゴキッ。

何処の部位の骨かは、お察しください。

「たったこれだけの注文でいいのかい？」

「はい、恭司君の気持ちでもうお腹いっぱいです！」

だったら頼むなよ、と右腕を押さえながら俺。クレープの生地を焼く音が船内から聞こえる。もう後にひけない俺は、今月最後のバイト代とのお別れの準備をする。俺が自分のケータイを取り出し、支払い用のボタンを押してアプリを起動していると、その様子を見ていたようである宮谷が話しかけてきた。

「ずいぶん警戒してるわね、私のこと」

「……！」

化けの皮が剥がれた、宮谷本来の大人びた口調だ。横目で様子を伺うと、先ほどの笑顔は消え、何処か寂しそうな表情で俺を見ている。

「べっつに。警戒してなんか……」

「嘘。一見自然な風に振る舞ってるけど」

「……」

宮谷が俺の顔をのぞき込んでくる。俺は声が届く範囲に人がいない

ことを確認してから、顔を宮谷から背けたままなるべく小さな声で返す。
「まあな。何せ殺人者が自分のすぐ横にいるんだ、警戒しないほうがおかしいだろ？」
「まあ、そういうものかしらね」
淡々とした声が返ってくる。でもね、と短く区切ってから宮谷は続けた。
「ＩＣＤＡに着くまでの道程が支倉恭司の最後の日常だから、今くらいは警戒しないで楽しみなさい。別にこんな一般人の往来が多い場所で、あなたをどうこうするつもりは全く無いから」
そう宮谷が言い終わると、お待たせしました～、と店員が巨大な袋に詰めたクレープの山を運んできた。さすが最新鋭のクレープ作成機だから早いな、と密かに感心しながら、俺がケータイを支払いのパネルに触れさせようとする。しかし、どういう風の吹き回しか、宮谷は俺の手を制すると、自らのポケットから黒一色のシンプルなケータイを取り出す。
「やっぱり今日は私が払います。恭司君」
再び華奢な少女に戻った宮谷は、俺に眩い笑顔を見せると、ケータイをピッ、とパネルに触れさせる。お支払いが完了しました、とパネルから文字が浮かび上がった後、店員からクレープを受け取った。その際に見えた残り残高の０の数は見なかったことにする。
店員のありがとうございました～、という律儀な挨拶を受けながら、俺の方を振り向くと、袋からクレープを２個取り出して俺に投げてきた。
「おっ？」
キャッチしたクレープ２個を見てみると、それらはこの店で一番高価なヤツだった。
「食べなさい。支倉恭司の最後の晩餐よ。夜じゃないけどね」
そう言って、宮谷はそそくさと俺の前を通り過ぎていく。俺は慌ててその後を追いかけた。

彼女との会話で、俺達の向かっている場所がＩＣＤＡだということが分かった。またそこに行ったら最後、俺は今までの日常を失うことも、良く理解していた。最悪死ぬことも。
これまでの日常を壊したくないなら、彼女に付いて行かなければいい。今すぐにでも回れ右して、全力で逃げ出せばいい。宮谷に命を狙われることになっても、警察に頼んで保護してもらえばいい。
昨日までの俺だったら、わざわざ自ら危険な場所に飛び込むなどしない。
しかし、今の俺は違う。
知ってしまったのだ。非日常を。忘れられなかったのだ。非日常を。この時点で、俺は心身共に非日常に染められた気がした。そして、その非日常から抜け出すことを諦めた。
今までは、日常を生きるために諦めてきた。今は、日常を生きることを諦めた。
そんな矛盾を意識下から砕くように、俺は宮谷を追いかけながらクレープにかぶりつく。

Ｄａｔｅ　ｏｒ　Ｄｅａｄ　？　～デートか死か～（後書き）

ランキングサイトに登録しました。気に入って頂けましたら、是非これからも応援をお願い致します。←

番外編1 ~Another View~（前書き）

こちらは番外編の扱いとなりますが、ここで登場するキャラクターは今後本編でも重要な存在となります。

番外編1 ~Another View~

「お、お！よっしゃーーー！やっっっとアイツラくっついたな！これでフェーズ1のノルマは達成っと」
「ひっぐひぐ。あぶないよ～クロくん。早くおりよ～よ～。あとこれ、私の望遠鏡だよ～。ひっぐ、自分の使ってよ～」
「あーうっせーな！泣くなよな、シロ！俺達『ボス』から所持物は共有するよう言われてんだろ！」
「シロこわいよ～。ひっぐ、クロくん～」
「だーーーー！うっさい！」

心地よい春風を全身で味わう。これは、地上にいる者だけの特権だ。この少年少女、『クロ』と『シロ』と呼ばれる二人の子供に、その暖かな風というものは存在しない。
今クロとシロがいる場所、それは高さ３３３Ｍを誇る、かつては日本で一番高かったタワー、その先端部だ。
このタワーが建設されてから1世紀近く。かつては東京と呼ばれていた日本の首都には、今では５００Ｍを悠に超えるビルが幾つも建っている。自身の象徴を否定された東京タワーは完全に過去の遺産となり、その姿は哀れなほどに寂れていた。最早ただの巨大な鉄の塊と化したこのタワーでは、来月にも取り壊し作業が開始される。
３００Ｍ上空からの景色というものは、時に人を竦み上がらせる。もし仮に落ちれば、例え高適合者でも即死。
遙か下方を運行する巡回船が米の粒ほどの大きさに見え、それが死に瀕している状況であることをより一層強調する。
ましてや、ここは寂れたタワーの天辺。春風とは思えないほど冷気を帯びた寒風が頬を撫で、振動一つで命綱である鉄筋が大きく揺れるとくれば、高さに耐性のある大人でも、生唾を飲まざるを得ないだろう。

だが、３３３M上空からいつ転落してもおかしくない、この状況に立たされた二人の子供の行動からは、恐怖といった感情が全く感じ取れない。

少なくとも、片方を除いては。

「うえええええええん！クロく～ん！早くおりよ～よ～！高いのこわいよ～！」

切な声で泣き叫ぶのは、小柄な体に不釣り合いな程大きい、真っ白なロングコートを羽織った『シロ』と呼ばれる少女だ。無理矢理大人用の服を着ました、と言わんばかりに、コートの中にすっぽり埋まっているが、姿形は小学校低学年の少女そのもの。

年相応に美しい純白の髪は、ツインテールに仕立てられている。普段は物大人しい彼女の精一杯のチャームポイントとなっていた髪型も、今では死際のウサギ耳の如く垂れ下がっていた。

身に纏った純白色のコートと比較し得るほどに、色素の薄い肌の持ち主だが、タワー天辺の鉄筋にしがみついている今は、白く滑らかな頬を紅色に染めて、大粒の涙を流している。

「だーーーーもう！だからうっさい、シロ！少しは黙ってろ！」

そう泣きわめく少女の隣りで、片手で鉄筋にしがみつき、片手で望遠鏡を覗きながら罵声を上げるのは、これまた小柄な『クロ』と呼ばれる黒髪ショートカットの少年だ。

同じく見てくれは、そこらの小学校低学年のやんちゃ少年と変わりない。こちらはシロと呼ばれる少女とは対照的に、漆黒のロングコートを身に纏っており、襟から覗くその顔は、実に健康的な小麦色をしている。

少年の罵声にビクッと大きく肩を振るわせた少女はしかし、嗚咽は漏らすものの、泣き止みはした。しばらくの沈黙を挟んでから、ゆっくりとしゃべり出す。

「クロくん、もういいよね？『恭司』お兄ちゃんと、茜お姉ちゃ…

…じゃなくて、『志穂』お姉ちゃんをくっつけろ、ていうノルマは達成できたんだよね？『大杉』っていう太ったお兄ちゃんに『青』を渡して、正解だったんだよね？恭司お兄ちゃんと、志穂お姉ちゃんのくっついた確認も、今できたんだよね？なら、早くおりよ？」

少女の精一杯な虚勢に対し、クロと呼ばれる少年は短く唸る。

「いや、こっちの件はいいんだけどよー。まだ『青』の配布、１００人に到達してないじゃん？これくらいの高さなら、ターゲットになりそうな連中、そうだな～、ビルから投身自殺しようとしてるヤツとか、見つけやすそうじゃん」

「私はいいもん。もう５００人配り終えたもん。後１００人は全員クロくんのノルマだよ」

だー、うっさいうっさい！と少女に罵声を掛けながら、クロと呼ばれる少年は足を鉄筋に巻き付けぶら下がり、すぐ真下の鉄筋に両手両足で必死でしがみついている少女の頭をグリグリする。

「わーーー！痛い痛い！クロくんごめん！分かったよぅ～！後１００人はシロも手伝うよぅ～！だからグリグリやめてよぅー」

ふん、と鼻を鳴らした少年は両手を少女の頭から離すと、足だけでぶら下がったまま目を閉じて腕組みをする。どうやら彼にしてみれば、怒ったという意味らしいが。

その時、一際大きな風が吹く。それに共鳴するかのように鉄筋が揺れ、振り子運動を開始した。

「きゃあああああああああ！」

「ぎゃあああああああああ！！！！止めてくれーーーー！死ぬーーー！」

子羊の如く震える少女の発した悲鳴を掻き消したのは、やんちゃ少年の絶叫だった。揺れる鉄筋から振り落とされないよう、クロは足でしがみつきながら叫び続ける。

「やっぱり～！クロくんも怖いんだね～！うえええええええん！」

「うりさあああああああああい！！別にこわかあああああねえええええええええ！」

大粒の涙と、伸びる鼻水をまき散らしながら振り回される少年の言葉にはしかし、説得力というものが欠片も感じられない。
彼らにしてみれば恐らく生きた心地がしなかったであろう数秒が経過した後、ようやく風が緩やかなものとなる。
少年は涙と鼻水を垂れ流し、少女はさらにきつく鉄筋にしがみつき、ぶるぶる震えている。
「は、ははは。楽しいアトラクションだったぜぃ」
「説得力の欠片もないよぅ、クロくん」
「何だと～!?シロ!」
「後、涙と鼻水でパウダーも落ちちゃってるよぅ～」
「――――は!」
少女の指摘を受けた少年は慌てて自身の頬に触れる。
そこにたっぷりと塗られていたはずの小麦色パウダーは綺麗に流れ落ちており、代わりに少女と同じ真っ白な素肌を外界に晒している事実を認識した彼は、今までにないほど慌てた姿を見せた。
「うんぎゃあああああ!!シロ!早く早く!早く俺様スペシャルパウダーを!」
「誰も見てないのにぃ。だってクロくんと私、双子みたいなものだよね。茶色のパウダーなんか塗らないで、普通に素肌晒してもいいと思うんだけどなぁ。
私、クロくんの雪みたいにきれーな肌、好きだよ?」
「『クロ』って名前で、肌が真っ白だったら、俺様の格好がつかないだろおおおおおお!!」
早く早く!と喚く少年に対し、少女は恐る恐るポケットに手を伸ばそうとする。片手両足だけで鉄筋にしがみつくのは、どうも少女には心許ないようだ。
そして再び、恐怖の寒風。
再びの振り子運動。
「ぎゃあああああああぁぁぁぁぁ!しろおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」

「くーーーーろーーーーくーーーーーーん！」

大きく揺れた鉄筋から振り落とされた少年は、叫びも虚しく、大粒の涙を空中に残しながら大地に吸い込まれていった。

「うえええええええん！クロくーーーん！置いてかないでよおおおおおお～！」

少女の叫びも、虚しいものとなった。

ＩＣＤＡ

４

驚くべきは、宮谷のその食欲だ。クレープ屋から目的地に到着するまでのおよそ１時間で、２０個はあったであろう大小のクレープを全て平らげたのだ。俺には宮谷の異様な力よりも、どうしてこれだけ食た上で、この抜群のスタイルを維持できるかが不思議でならなかった。

目的地、ＩＣＤＡまでの道中、俺たち二人は相当道草を食った。ゲームセンターがあれば迷わず寄るし、本屋があれば少し立ち読みをする。俺に気を遣っていたのだろうか。

そして、最終的に俺たちの足が止まったのは、一つの円柱の形をした超高層ビルの目の前だった。１フロア辺り、半径２００Ｍはあるだろうか。それが２５０個以上は重なっている。最新のフロートシステムを使用したエレベータ数十個が、その超巨大ビルの窓側を囲むように配置され、滑るように上下運動を繰り返す。

「あれ？このビルって・・・・・・」

ビルの手前に掲げてある会社名に視線を送る。アルファベットでＢＡＲＩＮＧと書かれいる。ベアリング、だろうか。確か、日本から発足した世界的な総合家電ブランドだったと思われる。

「こ、ここが、ＩＣＤＡ？」

もしそうであるならば、俺の立てた仮説は大きな間違いということになる。まさか、家電を専門としている会社が超人薬の作成に力を入れているはずもあるまい。

そして、この少女は本当に一体何者なのだろうか。

「入るわよ」

そう短く言った宮谷の後を追いかけるように、俺は付いていく。日本最大級の超大手会社だ。当然適合率０％の俺が、このような場所

に足を踏み入れた事はない。多少の緊張を伴いながら、俺は宮谷と共に巨大なエントランス口に入る。
ビルの第1フロアに入ると、俺の視界の先ではまるで超高級ホテルのような、広大なロビーが広がっていた。そのロビーを囲むように多数のエレベータが配置されており、ロビーの中心では広さに見合わない小さな受付台が配置され、笑顔の美人お姉さん二人が座っている。足下は大理石、上を見上げれば、遥上に1フロアの天井が存在した。
大抵はこういった場所こそ物静かで閑散としているものだが、1フロアのロビーでは人が激しく出入りしている。その9割がスーツ姿のサラリーマンで、皆ケータイを片手に誰かと通話しながら、腕の時計で時間を確認しつつ早歩きで移動していた。
宮谷はその流れに逆らうように、この場から一番遠いエレベータを目指して歩いていく。俺は慌てて追いかける。通り過ぎていくスーツ姿の男性達が、この場に見合わない格好の俺達に怪訝な視線を送る。思わず怖じ気づいた俺は、耐えかねて宮谷に小声で聞いた。
「なぁ、ベアリング社員の適合率の下限って、どれくらいだっけ？」
う～ん、とその場で唸った宮谷は、確か、と短く区切る。
「４９％だったハズよ」
「よんっ・・・・・・！」
驚きのあまり、大きな声を漏らす。怪訝な視線が、一層俺達に集中してきた。
４９％といえば、５０％と能力的には大差ない。適合率が５０％を超えている人数は全人口の５％程だったのを思い出す。
因みに世界最高適合者は、ナンバー８、過去ではイギリスと呼ばれていた国にいる青年で、無く子も黙る６１％だったはずだ。
じゃあ、と短く俺は区切って、前を歩く宮谷に聞く。
「ここにいる人達って、ほぼ全員適合率５０％以上の人？」
「そういうことになるわね」
俺達に集まるこの視線が、全て適合率５０％以上の人から。小猫が

ライオンの飼育場に放り投げられたようなものだ。
世界のトップ集団の前に、適合率０％という俺の抱える最大のコンプレックスが否応なく浮かび上がる。
俺と宮谷は、一番奥に存在するエレベータにたどり着くと、上階から本体が降りてくるのを待つ。
ドア上の液晶パネルは、現在エレベータが最上フロアである２７８フロアに存在して、こちらめがけて降りてきているという情報を示している。
俺は再び宮谷に聞く。
「なぁ、本当にこの場所でいいのか？なんか、低適合者の俺たちとは全く無縁そうな場所だし」
「低適合者？」
宮谷が不思議そうに聞く。
「ああ、確か私、学校では２１％ってことになってたわね」
「えっ、じゃあ実際は違うのか？」
モールドが浸透した現代では、産まれてくると同時にこの液状薬品の摂取を受ける。そして、摂取を受けた後、専用の機械を通して適合率を測定され、出てきた数字は国のデータベースに個人情報として登録される。入社の際は当然、高校に入学する際も国のデータベースからその情報を引き取ってくるのだ。国の管理するコンピュータにハックを掛けるという最難関の道を乗り越えて、ようやく情報の改竄ができるワケだが、今まで成功した輩はいない。つまり、学校側に提示される個人情報が偽物というのはあり得ないはずなのだが。
不思議そうな顔をする俺を、横からまじまじと眺めた宮谷は、まるで俺の心を見透かしたようなことを言う。
「さては、国が提示する情報が間違っているはず無いから、私が適合率を偽造するなんて不可能だ、なんて思ってる？」
「ま、まあな」
内心を完全に見透かされた俺は、少しだけ動揺する。

宮谷はエレベータ上部のパネルに視線を送る。周りは騒音だらけで、よほど近くにでも来ない限り、俺たちの会話が聞かれる心配はない。
「じゃあ逆に聞くけど、その国から学校に提示される個人情報が正しいっていう保証はどこから？」
「い、いや、それは国の言うことだし……」
「そこよ。そこなのよ」
いつの間にか俺の顔をのぞき込んでいた宮谷が、真剣な表情で俺を見つめる。
「何も知らない一般人は、国が自分達に絶対の信頼を置いていると思っている。そして一般人は国を信頼している。それは大きな間違い」
顔を正面に戻して宮谷は続ける。
「実際この世界で、絶対なんてものが存在すると思う？そんなバカげた物は存在しないわ。教科書もメディアも何もかも、私達に提供される全ての情報に人の手が加えられている。例えば、人間の体に心臓があるのは当たり前ってなっているけど、アナタはそれを自分の目で確かめた？違うでしょう？もしかしたら、心臓が無いまま生きている人だって、この世の中にはいるかもしれない。他人を介さず自分の五感で物事を捉えなければ、それは必ず正しいとは言えないの」
つまり、と俺が区切る。
「世の中には絶対なんてものは存在しない。だから、国の情報が絶対に正しいとは言い切れない。そう言いたいんだな？」
俺の言葉に宮谷は振り向くと、黙って頷く。
「何も知らない一般人だったアナタに教えといてあげるわ。アナタが思っている以上に、この世界は黒く、深い闇で閉ざされている。上辺に住む一般人は提示される情報を鵜呑みにし、いつしか自ら真実を暴くことを諦めた。どんなことにも先達がいて、そこから自分に来る情報は必ず正しいと思いこんでいる。本当はその情報は違うかもしれない。でも彼らは疑わない。真実は闇の中へ放り込まれて、

それを知っているのはごく少数」

エレベータが到着した。中は全くの無人だった。そのエレベータに乗り込んでから、俺は正面の鏡に背を持たれる。宮谷はエレベータの入り口を向き、階のボタンを押さないまま、俺に背を向けた状態で立った。ドアが完全に閉まると、宮谷は続ける。

「そして、私たちが今から向かう場所は、おそらくこの地球上で最も深く、真っ暗な闇に閉ざされた場所。設立されて8年。一度も一般人の前に晒されたことのない、世界第一級のトップシークレットの組織」

1回区切って俺の方を向く。エレベータの入り口を背にする形になると、宮谷は笑顔を見せた。

「ようこそ、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｏｄｅ　Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ&Ｄｅｌｅｔｅ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ、通称ＩＣＤＡへ。私たちＩＣＤＡは、この世界の真実を受け入れる覚悟と勇気があるのならば、アナタを歓迎するわ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5586z/

Fの軌跡

2011年12月24日04時48分発行